

2021年度 第一回 卒業論文指導会

日時：6月30日(水) 13:00～16:30

zoomにてオンライン開催 <https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/j/89332353260?pwd=c29Nem9JZURKS2RhMEVlSHp3RF1ldz09>

学生発表2分、質疑応答5分、計7分

発表順（予定）	氏 名
1	古館 充斗
2	足立 将彦
3	石元 悠一
4	青柳 春希
5	赤堀 萌子
6	石田 健太郎
7	泉山 玲司
	♪休憩♪
8	伊藤 歩桂
9	小野 裕太
10	小宗 創
11	佐藤 郁
12	佐藤 琴子
13	重信 文音
14	田中 泰平
	♪休憩♪
15	槌谷 遼平
16	野口 俊亮
17	原本 紘和
18	増山 大吾
19	増田 涼太
20	村田 千華
21	米倉 春希
22	李 元気

1. 2021 年度卒業論文関係の日程（予定）

（1）第 2 回卒業論文指導会：2021 年 10 月 27 日（水） 13：00～予定

（2）卒業論文題目届の提出期限：11 月 24 日（水）～12 月 1 日（水）17:00 締切

※ 教員の印鑑が必要。

※ このとき提出した題目はあとから変更できないので、教員とよく話し合ってから決めること。
題目届のコピーを手元に残しておくこと。

※ 今年度卒業しない場合は、卒業延長届を同期間に提出する。こちらも教員の印鑑が必要。

（3）卒業論文の提出期間：2022 年 1 月 4 日（火）～1 月 7 日（金）16:30 締切

（4）卒業論文要旨の提出期限：1 月 4 日（火）～1 月 11 日（火）16:30 締切

（5）卒業論文口述試験：2 月 4 日（金）13:00～予定

※ 口述試験は発表会形式で行なうので、3、4 年生は全員出席すること。

※ 発表方法に関する指示は、決まり次第連絡するので、メールで確認すること。

2. 基礎教育学コース 卒業論文提出様式

・ A4（1 頁 40 字×30 行、10.5 ポイント）で、17～34 枚＝400 字詰原稿用紙換算で 50～100 枚。

※ ページ数については目安とする。ただし、規定のページ数を超える場合には、教員の許可を得ること。

※ 枚数に註・図表は含めるが、表紙・目次・参照文献一覧は含めない。

・ 印刷は上質紙を使用すること。

・ コース事務室でファイルカバーを受け取り、綴じた上で提出すること（個人で購入しても構わない）。

※ 簡易製本を含む製本は避けること（審査終了後、研究室で製本の上、保存します）。

・ その他提出様式については、学生支援チームの指示に従うこと。

3. 卒論執筆上の注意事項

・ 卒表論文の題目を、題目届のものと一致させること（卒業論文要旨についても同じ）。

・ 論文の書式、体裁、註のつけ方、引用の仕方などについては、以下の URL を参照のこと。

『基礎教育学コース版 レポート／卒論を書くにあたって』

http://www.p.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2014/03/manual_kiso.pdf

（東京大学公式 HP 教育学部トップページ→在学生の方へ⇒「論文執筆マニュアル」の中の 各
コースの規定等：基礎教育コース、でも閲覧可能）

・ 論文の書式、体裁等について、提出前に一度チェックを受けること。

・ パソコンを使用する際、ファイルのバックアップについては、万全を期すこと。

・ 年末年始の教育学部棟への入館は事前申請が必要なので、必要な人は早めにコース事務の
小林さんか TA に相談すること。

・ 卒業論文執筆期間（昨年は 10 月末～）は、教育学部図書室の本(医学部 1 号館含む)を 20 冊まで、
予約取り寄せの本も 20 冊まで借りることができる（図書室の掲示を要確認）。

・ 基礎教育学コースの過去の卒業論文は、コース事務室にて読むことができる。

※ 本年度は例年と異なる対応がとられる可能性もあるため、必ず各自で学生支援チーム HP や
教育学部図書室・総合図書館 HP などをチェックすること。

・ その他分からないことは、卒論 TA（長戸・柏木・樋口・久島・濱本）までお気軽に連絡ください。
なお、メールを送信する際は TA 全員に宛ててメールを送ってください。

E-mail：sabakinoryu@gmail.com（長戸）、mutsuki.k.1223@gmail.com（柏木）、

tyb62.2@gmail.com（樋口）、hisaji65@gmail.com（久島）、junki.hamamoto@gmail.com（濱本）

他者への配慮と公正をめぐるアリストテレスの動揺

ー公正を超えて他者を尊重することー

1. テーマの概要や問題関心

現代の人格教育において、他者を尊重する資質の涵養が重要なのは言うまでもない。近年の人格教育の世界的な興隆は、多様な価値観や文化の共存を謳う現代世界の要請を反映するものであり、この理念の実現にはそうした資質が不可欠である。また、公正としての正義を愛する態度も教育項目としてしばしば掲げられる。しかし、他者への過度な配慮は往々にしてそういった精神と衝突する。というのも、我々は何らかの小さな悪事を働く他者にも寛容でありたいと思いつつ、公正としての正義に依拠して敢えて当人を突き放すことがある¹。個人もしくは共同体に対する罪は相応の罰により相殺されるべきだということだろう。また、我々は他者の利益のために尽力したいと思いつつ、不公平なほど負担を背負わされたり、自分の尽力に対する感謝や見返りが得られなかったりすると、公正としての正義に反していると感じてそうした努力をやめたくなくなることがある²。偏った負担の配分は相応の報酬で相殺されるべきだということだろう。このように、公正としての正義はしばしば他者への配慮を制限する。

しかし他方で我々は常にこうした正義に依拠しているわけではなく、時にはそうした観点では賞讃できないほどに、他者を傷つけないよう寛容になったり、他者の利益のために尽力したりすることもある。これらは必ずしも醜い振る舞いではなく、むしろ現代社会の理念である「共生」を考えるにあたりその意義が再検討されるべき資質であろう。

本稿は、イギリスのバーミンガム大学の人格教育研究機関であるジュビリー・センターが開発に取り組むアリストテレス（以下 Ar.）的人格教育に、上で見た他者への配慮と公正とが孕む問題に関して新たな示唆を与えることを目的とする。数ある人格教育の中でも Ar.主義のそれに焦点を当てるのは、人格教育理論の中でも Ar.主義が最も魅力的であるとするクリスチャン・クリスチャンソンの見解³に筆者が同意しているためである。

¹ いわゆる「寛容のパラドックス」はこの考えに基づいていると見てよいだろう。

² 友人同士の物財の受け渡し、一方的だと長続きしにくいことを思い出してほしい。

³ クリスチャンソン（2018）。

管見の限り、Ar.的人格教育に限らず Ar.主義的徳倫理学の論者は他者への配慮と公正に関する Ar.の議論の重大な矛盾を十分に検討できていない。『ニコマコス倫理学』において、Ar.は上で見たような他者の尊重と公正との緊張関係について一貫した立場を有しているとは言い難いのだが、既存の研究ではそのことの持つ意義がほとんど抽出されていないのである。その意義とは、第一には他者に配慮する姿勢と公正な態度を両立させることの困難さであり、第二には公正に反するほどまでに他者の幸福を尊重することが有する道徳的価値の重みである。その二点を Ar.的人格教育の開発者に示唆することが本稿の最終目標である。

例の緊張関係に対する Ar.の立場とはどのようなものか。『ニコマコス倫理学』における Ar.の表向きの主張によれば、Ar.は他者の利益のために徳を活かすことを賞讃するが、「公正」の徳によって他者への配慮に制限をかけてもいる。端的に言えば、公正に反するほど他者を尊重するのは不適切だと Ar.は考えているわけである。しかしながら Ar.は、他者への配慮と公正との緊張関係に関する自身のこうした立場を忘却しているかのようには思わせるほど矛盾に満ちた記述を、数多く残している。例えば金銭に関する「気前のよさ」の徳について論じた箇所では「……気前のよい人に関しては、贈与の点で超過し、その結果自分自身にはあまり財貨を残さないというようなことさえ、大いにありうる……。なぜなら、自分自身をかえりみないところが、気前のよい人の特徴だからである」⁴と述べる。さらには「……気前のよい人は、……いつも自分の方が不正を身に受ける側になってしまう……」⁵とまで記している。これらの記述は、有徳な人は公正としての正義に依拠して諸徳を働かせるものだという Ar.の原則と正面から衝突する。

これほど矛盾に満ちた記述を Ar.が残している以上、先に見たような他者への配慮と公正に関する Ar.の表向きの主張を真に受けるわけにはいかない。人格教育が脚光を浴びつつある今こそ、Ar.の思想をより正確に弁えることが必要である。それゆえに本稿では Ar.におけるそうした矛盾を浮き彫りにし、公正から逸脱するほど他者に配慮することを Ar.が多少なりとも肯定していたという事実を明らかにする。

私見では、Ar.の論述にこうした矛盾が見られることは Ar.的人格教育のみならず Ar.主義的徳倫理学にとっても利点になる。というのも、公正というものはしばしば非人間的な印象を与えるものであり、公正を過度に重視したと見なされる徳倫理学はそれゆえにしばしば批判を受けてきた。そこで Ar.が自覚的にせよ無自覚的にせよ、他者への配慮に関して公正を貫徹できていないことは、徳倫理学の持つそうした非人間的な印象を払拭する手がかりになるはずである。

⁴ アリストテレス (2002) p.150。

⁵ 同 p.152。

2. 目次

序章

- ・問題の所在
- ・先行研究の現状確認
- ・本稿の議論の進め方

第1章 アリストテレスにおける他者への配慮

- 1 節 アリストテレスにおける「善」の様相
- 2 節 「他者の善」への配慮と徳 – 完全な徳としての「正義」 –

第2章 アリストテレスにおける公正と運

- 1 節 徳の部分としての「正義」すなわち「公正」
- 2 節 行為や状態の公正な評価と運 – 運の影響を肯定すること –

第3章 他者への配慮と公正をめぐるアリストテレスの動揺

- 1 節 各種の徳における他者への配慮と公正をめぐる動揺
- 2 節 配分と是正における他者への配慮と公正をめぐる動揺
- 3 節 公正を超えて他者を尊重すること – 両者の両立困難性 –

終章

- ・全体の要約
- ・アリストテレス的人格教育への示唆
- ・今後の課題

3. 研究目的

本研究では 1.の問題意識から、アリストテレスにおける他者への配慮と公正に関する立場の動揺や矛盾を浮き彫りにし、彼の中で公正が必ずしも徹底されていなかったことを示すことで、アリストテレス的人格教育に新たな示唆を与えることを目的とする。すなわちそれは、他者を純粋に配慮する姿勢と公正な態度の両立の困難さ、そして公正の枠組から脱するほどまでに他者の善を尊重することが有する道徳的価値の重みを、アリストテレス的人格教育の議論の俎上に載せることである。

4. 今後の予定・方針・研究の方法

主な研究方法は 1.や 3.の視点でアリストテレスの『ニコマコス倫理学』と、補助として『政治学』を解釈することであり、最後までそれを主軸とする。並行して、まずは徳倫理

学の主要な論点を押さえるべく、徳倫理学における重要論文を一通り読み進めるとともに、徳倫理学の特徴を浮き上がらせるため、対抗馬である功利主義や義務論の本家にあたるミルとカントの著作も参照する。続いてアリストテレスにおける他者への配慮、公正のそれぞれを考察したいくつかの先行研究を重点的に読み解く。公正に関しては道徳的運の問題を扱った論考を含め、ロールズのアリストテレス理解も参考にする。さらに、公正に縛られない他者への配慮を扱う第3章3節の執筆にあたってはギリガンの議論を参考にする。

5. 参考文献リスト

- ・ アリストテレス (2001)『政治学』牛田徳子訳、京都大学学術出版会。
- ・ ——— (2002)『ニコマコス倫理学』朴一功訳、同。
- ・ Arthur, J. et al. (2014) *Knightly Virtues: Enhancing Virtue Literacy Through Stories* Research Report (Birmingham: Jubilee Centre for Character and Virtues).
- ・ 朝倉輝一 (2009) 「道徳教育とケアの倫理」 沖縄大学人文学部紀要 = Journal of the Faculty of Humanities and Social Sciences(11): 31-42、沖縄大学人文学部。
- ・ クリチャンソン、クリスチャン (2018)『子供を開花させるモラル教育－21世紀のアリストテレス的人格教育』中山理監訳、麗澤大学出版会。
- ・ デイオゲネス・ラエルティオス (1989)『ギリシア哲学者列伝 (中)』加来彰俊訳、岩波文庫。
- ・ 古田徹也 (2019)『不道徳的倫理学講義－人生にとって運とは何か』ちくま新書。
- ・ ギリガン、キャロル (1986)『もうひとつの声――男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』岩男寿美子監訳、生田久美子・並木美智子共訳、川島書店。
- ・ 廣川洋一 (2000)『古代感情論 プラトンからストア派まで』岩波書店。
- ・ ハーストハウス、R. (2014)『徳倫理学について』土橋茂樹訳、知泉書館。
- ・ ヒューム、デイヴィッド (2019)『道徳について』神野慧一郎、林誓雄訳、京都大学学術出版会。
- ・ Jubilee Centre for Character and Virtues (2017) *A Framework for Character Education in Schools* (Birmingham: Jubilee Centre for Character and Virtues).
- ・ カント、イマヌエル (2012)『道徳形而上学の基礎づけ』中山元訳、光文社古典新訳文庫。
- ・ 加藤尚武・児玉聡編 (2015)『徳倫理学基本論文集』勁草書房。
- ・ ミル、J. S. (2021)『功利主義』関口正司訳、岩波文庫。
- ・ ニーチェ、フリードリヒ (2009)『善悪の彼岸』中山元訳、光文社古典新訳文庫。
- ・ ——— (同)『道徳の系譜学』同。
- ・ Nussbaum, M. C. (2001) *The Fragility of Goodness: Luck And Ethics In Greek Tragedy And Philosophy* (Cambridge University Press).

- ・ プラトン (1979) 『国家 (上)』 藤沢令夫訳、岩波文庫。
- ・ ——— (1979) 『国家 (下)』 同。
- ・ ——— (1994) 『メノン』 同。
- ・ ——— (1998) 『パイドン』 岩田靖夫訳、岩波文庫。
- ・ Polansky, R. (2014) The Cambridge Companion to Aristotle's Nicomachean Ethics (Cambridge Companions to Philosophy)(Cambridge University Press).
- ・ ロールズ、ジョン (2010) 『正義論』 川本隆史、福間聡、神島裕子訳、紀伊國屋書店。
- ・ ラッセル、ダニエル, C. (2015) 『ケンブリッジ・コンパニオン 徳倫理学』 立花幸司監訳、相澤康隆・稲村一隆・佐良土茂樹訳、春秋社。
- ・ スミス、アダム (2013) 『道徳感情論』 高哲男訳、講談社学術文庫。
- ・ Snow, N. E. (2020) Contemporary Virtue Ethics (Elements in Ethics) (Cambridge University Press).
- ・ 立花幸司 (2012) 「アリストテレスの教育思想——教育の目的」『成城大学共通教育論集』 5号、成城大学、p.75-91。
- ・ テイラー、リチャード (2013) 『卓越の倫理—よみがえる徳の理想—』 古牧徳生・次田憲和訳、晃洋書房。
- ・ 土屋友子 (2011) 「アリストテレスの諸徳における寛容の徳の存在」『上智教育学研究』 24 号、p.79-104、上智大学教育学研究会。
- ・ アームソン、J. O. (2004) 『アリストテレス倫理学入門』 雨宮健訳、岩波現代文庫。
- ・ ウィリアムズ、バーナド (2020) 『生き方について哲学は何が言えるか』 森際康友・下川潔訳、ちくま学芸文庫。
- ・ ——— (2019) 『道徳的な運』 伊勢田哲治監訳、勁草書房。

1 タイトル 「ビオスとゾーエーに関する、アガンベンと木村の概念の違いについて」

2 テーマの概要・問題関心

ギリシャ語で生を表すビオスとゾーエーに関して、アガンベンは前者を生そのものの、後者を生の様式と区別している。（アガンベン 2003）それに対して、ビオスを生の総体、ゾーエーを個に宿る生と考えるのが木村敏である。（木村敏ほか 2017）

これらは単に表現が違うというわけではなく、生に対する姿勢から異なっていると考えられる。同じタームに対してなぜこのような概念の差が生じるのかについて、問題関心がある。

3 研究目的

先に述べたアガンベンと木村敏の概念の違いについて、その決定的な差異や共通点と言える部分、何が両者の立場を作っているのかを明らかにするのが本研究の目的である。

またそれを踏まえての自身の考察や、両者の立場から現代の問題をどのように捉えられるのかなどについても議論をしたい。

4 今後の予定・方針

まず、アガンベンのビオスとゾーエーの概念について文献調査を元に整理をする。その上で、木村のそれについても同様に整理をする。これに関しては、両者が影響を受けている思想家についても文献調査を進めたい。

また、両者の概念について批評をしている文献も存在するので、こちらも読み進める。

これらを踏まえて両者の違い等を議論したい。その際に、自身の考察を盛り込みたいと考えている。

5 参考文献リスト

Giorgio Agamben, *Homo sacer. Il potere sovrano e la nuda vita*, Torino: Einaudi, 1995. [ジョルジョ・アガンベン『ホモ・サケル 主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳、以文社、2003年]

Giorgio Agamben, *La comunità che viene*, Torino: Einaudi, 1990. [ジョルジョ・アガンベン『到来する共同体』上村忠男訳、月曜社、2015年]

上村忠男『アガンベン 《ホモ・サケル》の思想』講談社、2020年

木村敏ほか『生命と死のあいだ 臨床哲学の諸相』木村敏・野家啓一監修 河合文化教育研究所、2017 年

木村敏『あいだ』筑摩書房、2005 年

木村敏『心の病理を考える』岩波書店、1994 年

荒谷大輔『ラカンの哲学 哲学の実践としての精神分析』講談社、2018 年

Karl Kerényi, *Dionysos : Urbild des unzerstörbaren Lebens*, Stuttgart : Klett-Cotta, 1994.[カールケレーニイ『ディオニューソスー破壊されざる生の根源像』岡田素之訳、白水社、1997 年]

小松美彦『死は共鳴するー脳死・臓器移植の深みへ』勁草書房、1996 年

小松美彦『生権力の歴史ー脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐって』青土社、2012 年

小松美彦『「自己決定権」という罫』言視舎、2018 年

1. テーマ

勝利を追求する教育 ―ハンス・レンクの達成思想に着目して―

2. テーマの概要と問題関心

スポーツにおいて、勝利のためには手段を選ばずという「勝利至上主義」は問題になっている。2018 年の日大アメフト部の悪質タックル問題や甲子園において主戦投手の連投問題など、勝利至上主義が原因の一つとして考えられている。また、文部科学省の「運動部活動での指導のガイドライン」(文部科学省,2013)においても、勝つことのみを目指すことのないように各運動部活動の顧問の教員は指導する必要があると記載されているように、運動部活動において勝利至上主義の問題は早急に解決をしなければならない問題であると考えられている。一方で、私自身は中学から大学まで野球部に所属し勝利を追求してきたからこそ、主体性や協調性を養うことができたと感じている。そのため、勝利を追求することが悪と考えられているような現状に違和感を感じた。

スポーツにおいて勝利を追求するのは間違いなのだろうか。関朋昭によると、スポーツの定義の 1 つに「競争性：勝利を求めて二人以上で競う」(関,p126-127)があり、勝利至上主義でなければスポーツは成り立たないと述べている。また、スポーツ庁の令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果の概要より、児童生徒の半数以上が「勝った時」に運動やスポーツの楽しさを感じている。(スポーツ庁,2019)これらより、スポーツにおいて勝利を追求することはスポーツであるために必要なことでありかつ、学生がスポーツに取り組む上でも必要なことであると考えられる。

では、スポーツにおいて勝利を追求することが教育上どのような意義を持つのだろうか。私はドイツの哲学者ハンス・レンク(Hans Lenk,1935)の達成思想を基に、この問題を考察していきたいと考えている。レンクは、人間を達成する存在と位置付け「この人間像は次のような能力——行為と動作の方向性を定める能力、目標や課題を成し遂げようと努力する能力、そして向上しようとする能力——を含んでいます。それは外から認識できる形に実在化される必要があります」(レンク,2006)と述べ、また「スポーツによる達成は個人的な努力と苦労によって成し遂げられるものなのです。スポーツの達成は遂行行為や作品が正当に評価される偽りのない本物の動きになる。これが理想なのです」(レンク,2006)とも述べている。そこで、レンクのスポーツによる達成思想の中で勝利をどのように位置付けているのか考察し、学校スポーツにおいて勝利を追求することは果たして妥当であるのか検討する。

3. 研究目的

上記のように私自身の経験から勝利至上主義が否定的に考えられている社会状況に違和

感を覚えたため、学校スポーツにおいて勝利を追求することは妥当であるのか検討する。その上で本論文では、レンクの達成思想について研究し、勝利がこの達成思想の中でどのように位置付けられているのか考察しながら行う。

4. 今後の予定・方針

まずはレンクの著作やレンクについての論文を読み、レンク自身や達成思想について理解を深めたい。それから、達成思想の中で勝利がどのように位置付けられているのか考察し、勝利を追求する学校スポーツにおいて検討していきたい。

5. 参考文献リスト

- ・文部科学省(2013) 『運動部活動での指導のガイドライン』
- ・文部科学省(2018) 『運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン』
- ・スポーツ庁(2019) 『令和元年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果の概要について』
- ・関東学生アメリカンフットボール連盟(2018) 『規律委員会調査報告書 日本大学の選手による重大な反則行為について』
- ・関朋昭(2015) 『スポーツと勝利至上主義 日本の学校スポーツのルーツ』ナカニシヤ出版
- ・関朋昭(2019) 「勝利至上主義に対する批判の反証—スポーツの定義と価値から—」『経営論集(北海学園大学)』第 17 巻第 3 号、117-129 頁
- ・岡部祐介(2018) 「スポーツにおける勝利追求の問題性に関する一考察：＜勝利至上主義＞の生成とその社会的意味に着目して」『自然・人間・社会(関東学院大学)』第 65 号 15-37 頁
- ・大峰光博・友添秀則(2014) 「野球部における指導者の勝利追求への責任に関する一考察」『体育・スポーツ哲学研究』第 36 巻第 2 号 73-82 頁
- ・大野貴司(2017) 「わが国大学運動部における「勝利至上主義」とその緩和策に関する一考察」『東洋学園大学紀要』第 25 号 105-121 頁
- ・関根正美(1993) 「ハンス・レンクのスポーツ哲学に関する研究序説：その基本構想とアプローチ」『体育・スポーツ哲学研究』第 15 巻第 1 号 29-38 頁
- ・関根正美(1994) 「ハンス・レンクのスポーツ哲学における実存の問題」『体育・哲学研究』第 16 巻第 1 号 41-51 頁
- ・関根正美(1999) 『スポーツの哲学的研究—ハンス・レンクの達成思想』不昧堂出版
- ・関根正美(2009) 「西洋哲学におけるスポーツ哲学」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第 142 号 85-91 頁
- ・関根正美(2019) 「オリンピックの哲学的人間学：より速く、より高く、より強く、より人間的に」『オリンピックスポーツ文化研究』第 4 巻 91-100 頁

- ・許立宏 野上玲子・関根正美訳(2016) 「スポーツは単なるスポーツではない：ハンス・レンク著『S.O.S.オリンピック精神を救え』に関する哲学的考察」『体育・スポーツ哲学研究』第 38 巻第 2 号 147-156 頁
- ・久保正秋(2006) 「身体教育のメディアとしての『運動』—ハンス・レンクの『達成としての運動』概念を手がかりに—」『体育・スポーツ哲学研究』第 28 巻第 2 号 77-84 頁
- ・片岡暁夫・関根正美・深澤浩洋・窪田奈希左(1994) 「カール・アダム：達成哲学の非学術的考察」『体育・スポーツ哲学研究』第 16 巻第 1 号 53-63 頁
- ・ハンス・レンク 綿井永寿・平沢薫訳(1977) 『競技力とグループダイナミックス』プレスギムナスチカ刊
- ・ハンス・レンク 佐藤臣彦訳(1983) 「スポーツ哲学における人間学」『体育・スポーツ哲学研究』第 4・5 巻 25-34 頁
- ・ハンス・レンク グンター・A・ピルツ共著 片岡暁生・関根正美・深澤浩洋・窪田奈希左訳(2000) 『フェアネスの表と裏』不昧堂出版
- ・ハンス・レンク 畑孝幸・関根正美訳(2006) 「オリンピック競技者の人間学—オリンピック大会と競技者のための現代哲学に向けて—」『体育・スポーツ哲学研究』第 28 巻第 2 号 119-134 頁
- ・ハンス・レンク 畑孝幸・関根正美訳(2017) 『スポーツと教養の臨海』不昧堂出版

1. 名前、タイトル

- ①中山間地域における高校生の進路形成とその指導
- ②高校魅力化コーディネーターの役割と今後について

2. テーマの概要や問題関心

4月から島根県で、地域おこし協力隊として島根県立吉賀高等学校で働いています。自分が育った環境（都立中高一貫校→東大）とは全く違う環境の高校で働き、高校生と接する中で見えてきた課題を元に卒業論文を書きたいと思っています。（最初の2ヶ月は生活に慣れながら課題を探すだけで終わってしまったので、ここから急ピッチで論点を絞っていききたいです）

①中山間地域における高校生の進路形成とその指導

東京でバイトやボランティアをしていた時は、高校生の進路希望は、大まかに高偏差値帯（バイト先）

- ・大学に行ってから決めたい or 情報系/建築/法・経済/国際系などが多い
- ・自分が何をやりたいのか/どう世界に貢献するのか、という視点

低偏差値帯（ボランティア先）

- ・アパレル/美容系/音楽/デザインが多い
- ・勉強の道ではなく今は好きなことをやっていたい、という視点

のような印象でした。

しかし、現在島根県の高校（進学と就職が半々くらい）で働いていると、

- ・看護師/保育士/小学校の先生、のように資格を取って地元で手堅く働きたい
- ・〇〇系には憧れるけど、現実的に考えたらこの進路

というように、自分が何をやりたいか、よりは、この場所で何ならできるのか、を強く考えている印象を受けています。

高校でも、他の地方や世界に目を向ける＜地元の魅力・課題を考えさせる、といった指導が目立っており、どんな要因が高校生たちの意識形成に関わっているのか、に興味を持ちました。

②高校魅力化コーディネーターの役割と今後について

「地域資源を活用した特色ある教育課程の構築に向け、地域と高校の両者をつなぐ存在」として、学校で働いている高校魅力化コーディネーターという役職の実態と今後が気になっています。閉鎖的な空間だとされることもある学校において、地域と学校を繋ぐ存在である

高校魅力化コーディネーターは、うまく機能すれば良い影響があると思いますが、仕事内容がはっきりしていないことも多く、赴任した個人に任せすぎている（＝制度としてうまくいっていると言えるのか）とも感じています。

3. 研究目的

①中山間地域における高校生の進路形成とその指導

中山間地域に住む高校生たちにとって、さらにその地域にとって、どのような幼少期～高校生活を過ごし、どういう進路を選ぶとどのような道があるのかを整理した上で、現在の指導に活かしたい。（後任者にも引き継いでいきたい）

キャリア教育にもともと関心があるので、今後の参考にもしたい。

②高校魅力化コーディネーターの役割と今後について

今後重要な役割を担うと考えられる高校魅力化コーディネーターの実態、現状を分析することで、今後の学校がどうあるべきなのか、という視点にも繋げて考えたい。

4. 今後の予定・方針・研究の方法

実際に働いて、話を聞いて感じた課題がベースになっているので、まずは関連する分野の文献をきちんと読む。（すでに分析されていることと、今感じている実態や感覚が合っているのかずれているのか）

せっかく現地で色々な人の話を聞ける立場にあるので、7月中に方針を固めて、8-9月の休みを、直接インタビューする期間にしたい。

5. 参考文献リスト

- ・ベネッセ「高校生活と進路に関する調査」（2015）
- ・文部科学省「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 総合的な探求の時間編」
- ・樋田有一郎「地域移動が形成する家業継承者の二重の主体性-島根県中山間地域の地域内よそ者のライフストーリー分析を通して-」（2020）
- ・権藤誠剛/加藤寿朗「地域課題に教育学はどう応答するか-島根県「高校魅力化プロジェクト」を焦点に-」（2019）
- ・尾嶋史章/荒牧草平「高校生たちのゆくえ 学校パネル調査からみた進路と生活の 30 年」（2018）
- ・武田利邦「進路不安症候群の時代 登校拒否・いじめと学校化社会」（1986）
- ・荒川葉「『夢追い』型進路形成の功罪 高校改革の社会学」（2009）

1. タイトル（扱う予定のテーマ）

教育現場においてジェンダー観はどのように形成されるか。

2. テーマの概要や問題関心

1947 年に制定された教育基本法以降、日本では男女共学化が認められ、男女は性別に関わらず同じ学校で同じカリキュラムの授業を受けられるようになった。戦前は男女別学の形態が一般的とされており、男女で学習する内容は異なっていたほか、女性の地位は非常に低くみられていた。しかし、前述の教育基本法制定後の共学化に伴って、女性が男性と同等に学習する権利が保証され、女性の社会進出も進んでいったといえる。

その一方で、男女のジェンダー問題は依然として残っている。大学への進学率が男性の方が女性より高いこと、また偏差値の高い大学での男女割合が男性の方が大きいこと、理系に男子が多く文系に女子が多いこと、管理職における女性の割合が特別に低いことなどだ。これらから、共学化が進み男女が平等に学べる環境があったとしても、ジェンダーにおける問題は解消されていないと考えられる。私は、以上のような現象につながるであろうジェンダー観が教育の現場においてどのように形成されるのか研究したい。

3. 研究目的

現代の日本において、ジェンダー観は教育の場においてどのように形成されるのか、またそれが個人のキャリアにどのように関わっているのか研究することが目的。

4. 今後の予定・方針、研究の方法

まずは、男女共学化がどのような過程、背景で行われてきたのか調査し、教育における女性の権利獲得や社会進出について考察する。一方で、現代の日本の教育現場に着目して、子どもがどのようなジェンダー観を持っているのか、それがどのように形成されるのか、文献を読むことで研究していきたい。

尚、現時点では幅広く興味を持っているが、今後は研究対象や年代をより絞っていく予定。

5. 参考文献リスト

- 浅井春夫（2001）『日本の男はどこから来て、どこへ行くのか』 十月舎
- 生田久美子（2011）『男女共学・別学を問いなおす：新しい議論のステージへ』 東洋館出版会
- 伊佐夏実、知念渉 『教育達成過程におけるジェンダーと階層の影響』 『ポストフェミニズム言説の中の「ジェンダーと教育」再考』
- 伊藤公雄（2008）『ジェンダーの社会学』 放送大学教育振興会
- 隠岐さや香（2018）『文系と理系はなぜ分かれたのか』 星海社新書
- 柏木恵子、高橋恵子（2008）『日本の男性の心理学：もう1つのジェンダー問題』 有斐閣
- 片岡栄美（2001）『教育達成過程における家族の教育戦略』 「教育学研究」第68巻第3号
- 唐沢富太郎（1979）『女子学生の歴史』 木耳社
- 木村涼子（1999）『学校文化とジェンダー』 勁草書房
- 小山静子（2015）『男女別学の時代：戦前中等教育のジェンダー比較』 柏書房
- 小山静子、赤枝香奈子、今田絵里香（2014）『セクシュアリティの戦後史』 京都大学学術出版会
- 小山静子（2009）『戦後教育のジェンダー秩序』 勁草書房
- 佐藤和夫（2006）『男女共同参画社会における男女共学化、共修化の研究』
- 佐藤和順（2001）『幼稚園におけるジェンダーの再生産』 日本保育学会大会準備委員会
- 多賀太（2001）『男性のジェンダー形成：「男らしさ」の揺らぎのなかで』 東洋館出版社
- 友野清文（2013）『ジェンダーから教育を考える：共学と別学/性差と平等』 丸善出版
- 直井道子、村松泰子（2009）『学校教育の中のジェンダー：子どもと教師の調査から』 日本評論会
- ハンネローレ・ファウルシュティッヒ＝ヴィーラント（2004）『ジェンダーと教育：男女別学・共学論争を超えて』 青木書店
- 日下田岳史（2020）『女性の大学進学拡大と機会格差』 東信堂
- 広田照幸（2009）『ジェンダーと教育』 日本図書センター
- マイラ&デイヴィッド・サドガー（1996）『「女の子」は学校で作られる』 時事通信社
- 真橋美智子（2004）『男女共学の諸問題/[赤井米吉著]、男女共学はいかにおこなわれているか』 日本図書センター
- 真橋美智子（2004）『女生徒・男生徒：男女共学の記録/[清水隆久著]、女子学生の生態[永井徹著]』 日本図書センター
- 眞野豊（2020）『多様な性の視点でつくる学校教育：セクシュアリティによる差別をなくす学びへ』 松籟社

第一回卒論指導会発表資料

基礎教育学コース 4 年

09201104 石田健太郎

1. テーマ案

帰国子女が経験する優位性および障害についての考察

2. テーマの概要や問題関心

5 歳から 15 歳までの 10 年間で海外で過ごした自分の所感として、世間一般がなんとなく持っているであろう「帰国子女」のイメージが自分にはあまり当てはまらないと感じる。これは自分が海外での殆どの時間を日本人学校で過ごしたことと少なくとも無関係ではないと思われるが、それにしても「帰国子女」という単語にインパクトが乗りすぎていると感じる。むしろ日本人学校で義務教育を始め日本人学校で義務教育を終えた自分だからこそ、その違和感に敏感であるのかもしれない。中学・高校入試での制度面の優遇は、帰国子女の優位性を表す顕著な例と言える。また、帰国子女が日本の学校で言語面・文化面でさまざまな課題に直面するという話をしばしば聞く。これは自分のような日本人学校一筋の「温室育ち」にはあまり縁がない話であったが、実態として深刻な問題であると言える。教育機会の平等が求められる現代社会において、帰国子女がどのような扱いを受け、どのような障害を抱えているのかを検証する。

3. 研究目的

帰国子女が他の児童生徒と比べてどのような特長をもつのか考察する。それをもとに帰国子女がもつとされる優位性を検証するとともに、帰国子女が日本の学校で直面する課題とその背景についても明らかにする。

4. 今後の予定・方針、研究の方法

文献を読み進める。自分のイメージだけで考えている部分も多いのでまずは実態を知る。研究目的が定まりきっていないのが正直なところなので、方向性を固めつつ必要に応じてテーマを絞ったり新たな論点を加えたりする。

5. 参考文献

ロジャー・グッドマン著、長島信弘・清水郷美『帰国子女：新しい特権層の出現』岩波書店、1992 年

稲田素子「帰国生徒の受け入れにおける公正さをめぐって：実績のある受け入れ高校を事例に」『異文化間教育』2012 年 36 巻、pp.40-56

箕浦康子「日本帰国後の海外体験の心理的再編成過程：帰国者への象徴的相互作用論アプロ

- ーチ」『社会心理学研究』1987年3巻2号、pp.3-11
- 斎藤耕二「帰国子女の適応と教育：異文化間心理学からのアプローチ」『社会心理学研究』1987年3巻2号、pp.12-19
- 江渕一公「帰国子女のインパクトと日本の教育：『帰国児を生かす教育』の視点から」『社会心理学研究』1987年3巻2号、pp.20-29
- 古岡俊之「小学校における外国人子女教育の試み：文部省（現文部科学省）指定帰国子女教育受入推進センター校の取組から」『学校教育センター紀要』2020年5号、pp.61-74
- 古岡俊之「今求められる帰国子女・外国人子女教育の主要課題」『今求められる帰国子女・外国人子女教育』近代文芸社、1996年、pp.13-18
- 落合利佳「帰国子女の帰国後の適応過程：ケース報告」『京都文教短期大学研究紀要』2006年45巻、pp.87-96
- 黒羽カテリーナ「帰国子女は文化的アイデンティティをどう体験しているのか：2つの事例を対話的自己論の視点から検討する」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2013年7巻1号、pp.15-24
- 佐々木棟明・林正太「帰国子女教育研究：教育の対象化の視座から」『研究紀要/東京学芸大学教育学部附属竹早中学校』1996年34号、pp.137-167
- 一柳武「大学生の帰国子女観」『研究紀要/東京学芸大学附属高等学校大泉校舎』1992年17号、pp.115-121
- 毎日新聞社『教育を追う 4 国際化の中で』毎日新聞社、1978年
- 渡部淳『帰国生のいる教室』日本放送出版協会、1991年
- 海外子女教育史編纂委員会『海外子女教育史』海外子女教育信仰財団、1991年
- 在華同胞帰国協力会・日本子供を守る会『帰ってきた子供たち』講談社、1953年

概要・問題関心と研究目的

自身が高校時代までに感じていた、多くの学生に共通する、学校の学習に対する意欲のなさ、やらされている感というのがいったいどこからくるのか、また、解決できる問題なのか気になり、当初のテーマとした。日本社会が、エリート教育段階からマス教育段階へ移行し、高等教育機関への“不本意就学”が増えているため、そのような閉塞感があるのかと考え、社会システムとしての教育機関の現状を取り扱おうと思ったが、規模が大きい上、問いを立てにくかったのでもうまいかなかった。そこで、当初感じていた自身の経験に立ち返り、「大学受験のために勉強を“させられている。”」現在の高校、特に進学校の指導方針やカリキュラムに焦点を当て、過去との比較から現状を分析したいと考えた。

まだ資料等に基づくものではなく、感覚的な話ではあるが、麻布高校や日比谷高校といった、長い歴史を持つ有名進学校では、「自由」を体現するようなカリキュラムが組まれ、生徒自身が主体的に学びとる教育、教養教育といったものが行われていたように感じる。これは意図されたものというよりは、旧制高等学校の流れを汲む学習形態であるかもしれないが、受験戦争の激化に伴い、その気風は失われ、文字通り「進学」を目指すための、受験勉強を詰め込むような授業が展開され始めたことが、感覚や証言から推察できる。必要に迫られた変化なのかもしれないが、この影響で、生徒の主体性は失われ、学習に対する意欲が低下した側面は、少なからずあると考えられる。その意欲の低下が、学問への関心の低下や、社会の閉塞感に繋がっているのではないだろうか。

この問題はまだ想像に過ぎないため、この卒業論文を通して、まず、実際にそのような変化があるのか、その原因として受験戦争は関わっているのかについて確かめたい。それらを明らかにした後は、その変化がどういう意味で好ましくないのかを明確にし、その問題についての展望を探りたい。

また、今回、有名進学校に焦点を当てた意図として、日本における「エリート教育」に関する議論を知り、考えたい、という目的もある。高等教育機関への進学率が向上して以来、特に上位層だけを焦点とした議論というのは、避けられてきたように感じる。実際、文献も多くは出てこないもので、この分野について調べを進め、本当に避けられてきたのか、議論の必要がないだけなのか、問い直していきたい。

今後の方針・研究方法

段階として、現状認識→過去との比較→問いの検証→展望に関する提言という流れで進めるべきと考えています。

現状認識としては、有名進学校の受験事情やカリキュラムに関して踏み込んだ資料にあたりたいです。よくある議論だとは思っているので、同じ問題意識に基づくものに当たれば良

いと思っていますが、現状あまり見つかっていません。もし無ければ、有名進学校に絞らず、受験システム全体の問題として取り上げたものを探したいです。

過去との比較として、感覚的に思っている、旧制高等学校風の学習形態や生徒の学習態度について、確かめたいです。方法等は未定です。

問い以降に関しては、前半に基づき変わってくると思うので、まだ定まっています。

参考文献

マーチン・トロウ『高学歴社会の大学—エリートからマスへ』東京大学出版会、1976 年

天野郁夫『試験の社会史』平凡社、2007 年

天野郁夫『高等教育の時代(上)(下)』中公叢書、2013 年

中村高康『大学入試がわかる本 改革を議論するための基礎知識』岩波書店、2020 年

トーマス・P・ローレン『日本の高校—成功と代償』サイマル出版会、1988 年

『日比谷高校百年史』日比谷高校百年史刊行委員会、1979 年

小宮山博仁『学歴社会と塾』新評論、1993 年

ロナルド・P・ドーア『学歴社会 新しい文明病』岩波書店、1978 年

竹内洋他『現代高校生の「受験生活」についての実証的研究』京都大学教育学部教育社会学研究室

1. テーマ

教育工学における教育観および教育方法の変遷

2. テーマの概要および問題関心

元々工学部の電子情報工学科に所属していた経験や情報の教員を目指していることから、情報教育、特にプログラミング教育のあり方に関心がある。また、新学習指導要領において小学校、中学校、高等学校でプログラミングが必修化され、現在プログラミング教育に注目が集まっていると言える。そのプログラミング教育を主導している組織の 1 つに教育工学会がある。教育工学という言葉は日本では 1960 年代から使われるようになったが、現在に至るまでに、教育工学会における教育観は大きく変化しており、それに伴い教育方法も様々な展開してきている。例えば、1960 年代は行動科学を基盤とし、個人学習によって効率よく学力を身につけることを目指していたが、1990 年代以降は社会的相互作用が生じる学習環境を重要視している。このように教育工学のあり方は時代によって大きく異なるが、その歴史についてはあまり研究が進められていない。そこで、教育工学がどのようにして学問として制度化されていったのか、そしてどのような意見が有力となっていったのかをたどることで、教育工学という学問を改めて位置付け、現在のプログラミング教育等のあり方を考え直したい。

3. 研究目的

教育工学の歴史をまとめた研究は少ないが、教育工学の歴史をたどり直すことは、現在のプログラミング教育や ICT 教育のあり方への理解や提言につながり、重要であると言える。そこで、教育工学が学問として制度化されていく様子とその中での有力な意見の変遷を明らかにし考察していく。

4. 今後の予定・方針

まだ文献をあまり読んでいないため、まずは教育工学の基礎的な文献から読み進め、教育工学のどのような点に特に着目するかを検討する。また、佐伯は当初教育工学の立場にあったが、その後教育工学から離れているため、佐伯の考えをたどり直すことも検討したい。

参考文献

市川伸一『コンピュータを教育に活かす——「触れ、慣れ、親しむ」を超えて』勁草書房、1994 年。

ウィリアム・A・ディターリン『プログラム教育入門——産業教育と学校教育の新方式』小野浩三訳、ぺりかん社、1969 年。

岡本敏雄「教育工学の歴史」『電子情報通信学会「知識ベース」』S3 群 11 編、電子情報通信学会、2011 年。

佐伯胖『コンピュータと教育』岩波書店、1986 年。

佐伯胖『新・コンピュータと教育』岩波書店、1997 年。

坂元昂『教育工学の原理と方法』明治図書出版、1971 年。

坂元昂『能力はどこまでのばせるか——教育工学の考え方』講談社、1971 年。

坂本昂・東洋『これがコンピュータ教育だ——日本のコンピュータ教育を拓く』ぎょうせい、1987 年。

坂元昂「学校教育における情報教育の歩み」『教育と情報』第 412 巻、文部科学省、1992 年 7 月、8-14 頁。

坂元昂・岡本敏雄・永野和男『教育工学とはどんな学問か』ミネルヴァ書房、2012 年。

鈴木秀雄『技術科教育史——戦後技術科教育の展開と課題』開隆堂、2009 年。

西本三十二・西本洋一『教育工学』紀伊国屋書店、1964 年。

沼野一男『教授工学入門』玉川大学出版部、1973 年。

林向達「日本の教育情報化の実態調査と歴史的変遷」『日本教育工学会研究報告集』第 12 巻第 4 号、日本教育工学会、2012 年 10 月、139-146 頁。

東原義訓「我が国における学力向上を目指した ICT 活用の系譜」『日本教育工学会論文誌』第 32 巻第 3 号、日本教育工学会、2008 年、241-252 頁。

堀田龍也・木原俊行「我が国における学力向上を目指した ICT 活用の現状と課題」『日本教育工学会論文誌』第 32 巻第 3 号、日本教育工学会、2008 年、253-263 頁。

堀口秀嗣「日本における CAI ハードウェアに関する研究開発動向」『日本教育工学雑誌』第 7 巻第 4 号、日本教育工学会、1983 年、143-149 頁。

松田稔樹「教育工学のあり方に関する一考察」『日本教育工学会第 25 回全国大会講演論文集』日本教育工学会、2009 年、929-930 頁。

松田稔樹「機器操作能力から問題解決力へ——情報教育の課題と展望」『Informatio：江戸川大学の情報教育と環境』第 14 巻、江戸川大学情報教育研究所、2017 年 3 月、3-12 頁。

山西潤一・赤堀侃司・大久保昇『学びを支える教育工学の展開』ミネルヴァ書房、2018 年。

(仮題) サバルタンにおける欲望・承認・権力

——バトラーとスピヴァクに着目して——

09-201106 基礎教育学コース4年 小野裕太

1. テーマの概要・問題関心

代表作『サバルタンは語ることができるか』(以下『サバルタン』)で一躍ポストコロニアルな知識人として名乗りを上げたインドの哲学者・比較文学者であるガヤトリ・C・スピヴァクの思想は、今日においてもその重要性を失っていないばかりか、その理論的先鋭さを増しているように思われる。ポスト構造主義、マルクス主義、フェミニズムを理論的基盤としつつ、現代のグローバル社会において第三世界のサバルタン女性がいかに国家という構造から排除され、男性中心主義や植民地主義によって抑圧されているのかを暴き立てる彼女の手腕は、多くの批判や論難に晒されながらも未だその鮮烈さを失っていない。

『サバルタン』において彼女はフーコーやドゥルーズといったポスト構造主義的な第一世界の知識人が Representation という概念に含まれる2つの側面、すなわち政治的代弁/代表 (vertreten) と美学的再現/表象 (darstellen) とを混合している点を指摘し、第一世界の知識人による第三世界のサバルタンに対する認識の暴力を問題視する。こうした認識の暴力を回避するために彼女が提示するのが「アンラーン」(Unlearn) という戦略であり、知識人は比較文学の教育を通して自らの特権を「損失として捨てる」ことを学ぶ必要がある、と彼女は主張する。彼女が「サバルタンは語ることができない」という時、それは専ら「聴く側」である第一世界の知識人側の解釈の支配的コンテクストを問題にしているのだ。

その一方で彼女は「語る側」であるサバルタンの側の主体の構造にも着目し、「サバルタンの主体の欲望の再配置」が必要であるとも述べている。「サバルタンが語る」ためには、知識人たちが持ち合わせてしまっている解釈の支配的コンテクストを脱構築するのみならず、サバルタンに対する教育的介入を行うことも必要とされるということを主張しているのだ。卒業論文で主に検討したいのはこの「欲望の再配置」という戦略とそれを可能にする諸条件についてであり、特に①スピヴァクの中で「欲望」(Desire) という概念がどのようなものとして位置づけられているのか/位置付けられうるのか、②「欲望の再配置」という教育的戦略は知識人における代表＝表象あるいは想像力、アンラーンといった問題系とどのように関係するのか、③「欲望の再配置」はいかにして可能なのかといった諸点について検討したい。その際、

ジュディス・バトラーの「パフォーマティヴィティ」(Performativity) 概念と、それを支えるスピノザの「コナトゥス」(Conatus) 概念及びヘーゲルの承認論における欲望の位置付けに対するバトラーの理解を参照することを通して、議論のための補助線を用意したい。

2. 章立て (仮)

序章

第1節：問題関心と先行研究検討

第2節：「サバルタン」とは何か ―『獄中ノート』とサバルタン・スタディー

ズ

第3節：章構成と各章の議論の要約

第1章：サバルタンにおける代表＝表象 (Representation) の問題

第1節：「透明な知識人」におけるイデオロギーの不在 ―フーコー・ドゥルーズ批判

第2節：「サバルタンは語ることができない」とはどういうことか

第3節：想像力とアンラーンのための比較文学 ―ブヴァネシュワリとドラウパーディ

第2章：サバルタンにおけるパフォーマティヴィティ (Performativity) の問題

第1節：バトラーにおけるパフォーマティヴィティ概念の示差的整理

第2節：彼女たちはなぜすれ違ったのか ―『国家を歌うのは誰か?』における対立軸

第3節：パフォーマティヴィティ概念の時間的次元 ―知られざる歴史を語ること

第3章：サバルタンにおける欲望 (Desire) の問題

第1節：承認への欲望とコナトゥス ―バトラーにおけるスピノザ・ヘーゲル理解

第2節：サバルタンにおける「欲望の再配置」という戦略

終章：再び、サバルタンは語ることができるか

第1節：議論のまとめ・結論

第2節：今後の研究課題

3. 研究目的

大きな目的としては、スピヴァクの思想の教育学的意義を検討することである。哲学・比較文学・フェミニズムの領域におけるスピヴァクの研究が進む中で、教育学的な視角から彼女の思想を検討した研究は（特に日本では）未だ多いとは言えない状況にある。スピヴァクの議論の中には教育学

的含蓄に富むものも少なくなく、また彼女自身故郷インドでサバルタンとその教師たちに対する教育実践を展開しており、教育学的な発展可能性は十分にあると考えている。

また、自分自身が教育系 NPO にて 1 年半ほど外国ルーツの子どもの支援に携わってきたということもあり、個人的には日本における外国ルーツの子どもに対する教育の哲学に関心を持っている。民族的同一性の高い日本社会の中でマイノリティとしてサバルタン化している外国ルーツの子どもが語るための教育学的戦略を構想するというプロジェクトにおいて、スピヴァクのエデュケーション的意義の検討はポジティブなものを提示してくれるのではないだろうか。

4. 今後の予定・方針、研究の方法

主にスピヴァク・バトラー両者の論文・著作を検討することで議論を進める。翻訳があるものについては翻訳を検討しつつ原文を適宜参照する。スピヴァクに関しては翻訳されていない論文も多く存在するため、英語で書かれた彼女の論文の入手・検討に特に時間を割きたい。

スケジュールとしては以下を目安に進める

- ・ 7,8 月：先行研究整理・スピヴァク/バトラーの重要文献講読
- ・ 9,10 月：スピヴァク/バトラーの重要文献講読続き・適宜英語文献参照
- ・ 第 2 回卒論指導会：章立て・各章内容の確定
- ・ 11,12 月：執筆

5. 主な参考文献リスト

<スピヴァクの著作 ★は重要文献>

★Harasym, S. and Spivak, G. C., *The post-colonial critic: interviews, strategies, dialogues*, New York: Routledge, 1990. [サラ・ハラシム、ガヤトリ・C・スピヴァク『ポスト植民地主義の思想』清水和子・崎谷若菜訳、彩流社、1992 年]

Landry, D., Spivak G. C. and MacLean, G. M., *The Spivak reader: selected works of Gayatri Chakravorty Spivak*, New York: Routledge, 1996.

Spivak, G. C., *Ethics and politics in Tagore, Coetzee and certain scenes of teaching*, Calcutta; New Delhi: Centre for Studies in Social Sciences, Calcutta, 2019.

★Spivak, G. C., 星野俊也, 本橋哲也 and 篠原雅武『いくつもの声: ガヤトリ・C・スピヴァク日本講演集』人文書院、2014 年。

Spivak, G. C., *An aesthetic education in the era of globalization*, Cambridge, Mass: Harvard University Press, 2013.

★Spivak, G. C., *Nationalism and the imagination*, London: Seagull Books, 2010. 〔ガヤトリ・C・スピヴァク『ナショナリズムと想像力』鈴木英明訳、青土社、2011年〕

★Spivak, G. C., 本橋哲也, 新田啓子, 竹村和子, 中井亜佐子 and 鶴飼哲『スピヴァク、日本で語る』みすず書房、2009年。

Spivak, G. C., *Other Asias*, Malden, Mass: Blackwell, 2008.

★Spivak, G. C., and 大池真知子『スピヴァクみずから語る：家・サバルタン・知識人』岩波書店、2008年。

★Spivak, G. C., and Butler, J. P., *Who sings the nation-state?: language, politics, belonging*, London: Seagull Books, 2007. 〔ガヤトリ・C・スピヴァク、ジュディス・バトラー『国家を歌うのは誰か？：グローバル・ステイトにおける言語・政治・帰属』竹村和子訳、岩波書店、2008年〕

★Gayatri Chakravorty Spivak 1942. *In other worlds: essays in cultural politics*, New York: Routledge, 2006. 〔ガヤトリ・C・スピヴァク『文化としての他者』鈴木聡訳、紀伊國屋書店、2000年〕

Spivak, G. C., Swapan, C., Milevska, S. and Barlow, T. E., *Conversations with Gayatri Chakravorty Spivak*, Calcutta: Seagull Books, 2006.

★Spivak, G. C., *A critique of postcolonial reason: toward a history of the vanishing present*, Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1999. 〔ガヤトリ・C・スピヴァク『ポストコロニアル理性批判：消え去りゆく現在の歴史のために』上村忠男・本橋哲也訳、月曜社、2003年〕

Spivak, G. C., *Outside in the teaching machine*, New York ; London: Routledge, 1993 .

★Spivak, G. C., “Can the Subaltern Speak?” in *Marxism and the Interpretation of Culture*, Cary Nelson and Larry Grossberg (eds), Urbana: University of Illinois Press, 1988, pp.271-313. 〔ガヤトリ・C・スピヴァク『サバルタンは語ることができるか』上村忠男訳、みすず書房、1998年〕

★Spivak, G. C., “Translator’s Preface” in *Jacques Derrida, Of Grammatology*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1976. 〔ガヤトリ・C・スピヴァク『デリダ論——「グラマトロジーについて」英語版序文』田尻芳樹訳、2005年〕

＜バトラーの著作 ★は重要文献＞

Butler, J. P., *Senses of the subject*, Fordham University Press, 2015.

Butler, J. P., *Parting ways: Jewishness and the critique of Zionism*, New York: Columbia University Press, 2013. [ジュディス・バトラー『分かれ道：ユダヤ性とシオニズム批判』大橋洋一・岸まどか訳、青土社、2019年]

★Butler, J. P., *Giving an account of oneself*, New York: Fordham University Press, 2005. [ジュディス・バトラー『自分自身を説明すること：倫理的暴力の批判』佐藤嘉幸・清水知子訳、月曜社、2008年]

★Butler, J. P., *Gender trouble: feminism and the subversion of identity*, New York: Routledge, 1999. [ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社、2018年]

★Butler, J. P., *The psychic life of power: theories in subjection*, Stanford, Calif: Stanford University Press, 1997. [ジュディス・バトラー『権力の心的な生：主体化＝服従化に関する諸理論』佐藤嘉幸・清水知子訳、月曜社、2019年]

Butler, J. P., *Excitable speech: a politics of the performative*, New York: Routledge, 1997.

★Butler, J. P., *Bodies that matter: on the discursive limits of "sex"*, New York ; London: Routledge, 1993. [ジュディス・バトラー『問題＝物質（マター）となる身体：「セックス」の言説的境界について』佐藤嘉幸監訳、以文社、2021年]

★Butler, J. P., *Subjects of desire: Hegelian reflections in twentieth-century France*, New York: Columbia University Press, 1987. [ジュディス・バトラー『欲望の主体：ヘーゲルと二〇世紀フランスにおけるポスト・ヘーゲル主義』大河内泰樹ほか訳、堀之内出版、2019年]

＜スピヴァク思想の教育学的検討に関する先行研究（日本）＞

上村忠男「シラーをサボタージュする(上)スピヴァクとグローバリゼーションの時代における美的教育」『みすず』第56巻第4号、みすず書房、2014年、6-20頁。

上村忠男「シラーをサボタージュする(下)スピヴァクとグローバリゼーションの時代における美的教育」『みすず』第56巻第5号、みすず書房、2014年、14-25頁。

丸山恭司「教育という悲劇、教育における他者：教育のコロニアリズムを超えて(報告論文,教育における他者性,Forum 1)」教育思想史学会『近代教育フォーラム』第11巻第0号、2002年、1-12頁。

久保田健一郎「教育学の新たな地平：ポストコロニアリズムと教育学の交錯(コメント論文,教育における他者性,Forum 1)」教育思想史学会『近代教育フォーラム』第11巻第0号、2002年、37-45頁。

佐藤雄一郎「子どもが抱える「生きづらさ」と生活指導の課題に関する一考察：ポストコロニアリズムを視点として」大阪教育大学『大阪教育大学紀要』第69巻、2021年、131-141頁。

喜多加実代「語る／語ることができない当事者と言説における主体の位置:スピヴァクのフーコー批判再考」本社会学理論学会『現代社会学理論研究』第3巻第0号、2009年、111-123頁。

小玉亮子「語らない子どもについて語るということ；教育「病理」現象と教育研究のアポリア」『教育学研究』第63巻第3号、1996年、286-293頁。

小玉重夫「教育思想史におけるポストコロニアルの視点(第IV部「教育」の彼方へ?:思想史のなかの「学ぶ」「教える」)」教育思想史学会『近代教育フォーラム』2010年、153-161頁。

横山香「大学生のボランティア活動を文化研究の視点から考える：G・C・スピヴァクの理論と実践を手掛かりとして」兵庫教育大学『兵庫教育大学研究紀要』第45巻、2014年、155-162頁。

船橋一男「「声」という概念の導入について(覚え書き)--ポストコロニアルの文化政治学から教育実践へ」埼玉大学教育学部学校教育(教育臨床)講座『埼玉大学教育臨床研究』第2巻、2004年、75-88頁。

虞嘉琦「G・C・スピヴァクの「応答責任」：教育開発におけるサバルタンへの倫理を構想する試み」中国四国教育学会『教育学研究ジャーナル』第26号、2021年、11-20頁。

<その他 (Spivak の Desire 概念についての先行研究含む) >

Gairola, R., "Burning with Shame: Desire and South Asian Patriarchy, from Gayatri Spivak's "Can the Subaltern Speak?" To Deepa Mehta's Fire", *Comparative literature*, Vol.54 No.4, 2002, pp.307-324

Gramsci, A., 『歴史の周辺にて「サバルタンノート」注解』松田博編訳、明石書店、2011年。

Klerk, E., "The Poverty of Desire: Spivak, Coetzee, Lacan and Postcolonial Eros", *Journal of literary studies (Pretoria, South Africa)*, Vol.26 No.3, 2010, pp.65-83

Morton, S., “Subalternity and Aesthetic Education in the Thought of Gayatri Chakravorty Spivak”, *Parallax (Leeds, England)*, Vol.17 No.3, 2011, pp.70-83

Zimbler, J., “Caring, Teaching, Knowing: Spivak, Coetzee and the Practice of Postcolonial Pedagogies”, *Parallax (Leeds, England)*, Vol.17 No.3, 2011, pp.19-31

藤高和輝『ジュディス・バトラー：生と哲学を賭けた闘い』以文社、2018 年。

研究テーマ

部活動と教育の乖離 -教育の一環から勝利至上主義に-

概要、問題関心

自分はこれまで13年野球を続けてきて、中高でも部活として野球部に所属してきた。そのなかで疑問に思ったことは日本において「enjoy baseball」というものが忌避されているのではないかということである。最初の野球を始めるきっかけというのは、父親とキャッチボールをしたり学校の休み時間に三角ベースを行ったりと楽しむことやプロ野球などを見て憧れて始めるという事が多いだろう。しかし始めた時は楽しんでいた野球というものが、中学高校で部活に入るかクラブチームに所属していると勝つことが楽しいというように変化していくのである。自分の野球人生を振り返っても夏休みに炎天下の中一日中練習したり、冬の寒い中走ったりと全く楽しくないことの方が多かった記憶がある。ではなぜこのような事に必死で取り組むのだろうか。これに対する解答は自分の中では一つしかない。勝利するためである。クラブチームや大学、社会人、プロ野球というように元から勝利するという事を第一としているチームならこのようなことも理解出来るが、中高の部活というのは元来教育の一環として行われてきたことである。これはおかしいのでは無いだろうか。この疑問を発端として自分は本研究を進めていこうと思う。

現在の高校野球というものは、甲子園での投手の登板過多に関する論争が行われるなど、トーナメント制を導入しているが故の勝利至上主義という側面を持っているように思われる。部活動として行われているはずなのに教育という本来の目的から乖離していることは否めないだろう。また私立の野球強豪校などには推薦制度が用意されているなど、学業とは切り離されている高校も少なくない。その証拠に甲子園などの結果を参照しても、公立の高校などが優勝をした例というのはだいぶ昔に遡らないといけなない。ここまで勝利をするといったことに価値を見出すようになったのはなぜか、またいつ頃かなのかという部活動と高校野球の教育的側面の変遷ということに最初考察する。その後他国での学生野球と日本の高校野球の違いなどを含めながら現在の高校野球の問題点を捉えて、最終的には今後どのように高校野球は展開していくべきなのかということについて論じていく。

研究目的

現在の高校野球の問題点について歴史的な面と、他国と比較することで理解出来る日本独自の文化というふたつの視点からアプローチすることで、高校野球ひいては部活動の将来の展望を明らかにする。

研究方法

部活動の歴史について書籍を通じて振り返るとともに、高校野球を経験している知人に実際どのような部活動生活を送っていたのかインタビューする。同時に海外での学生野球を経験している知人にオンライン上でインタビューをする予定。またスポーツビジネスについて本を出している方にお話を伺う機会を作ろうと考えている。

参考文献

- ・中澤篤史 「学校運動部活動と戦後教育学/体育学」『〈教育と社会〉研究』23号 一橋大学〈教育と社会〉研究会 2013年 135項-144項
- ・中澤篤史 「学校運動部活動の戦後史(上)」『一橋社会学報』3号 一橋大学大学院社会学研究科 2011年 25項-46項
- ・中澤篤史 「学校運動部活動の戦後史(下)」『一橋社会学報』3号 一橋大学大学院社会学研究科 2011年 47項-73項
- ・河村明和 「日本の学校教育の変遷から見た部活動の現状と今後の在り方についての検討」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』24号 早稲田大学大学院教育学研究科 2016年 43項 - 53項
- ・中澤篤史 『運動部活動の戦後と現在：なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』青弓社 2014年3月26日
- ・中村哲也 「学生野球憲章とはなにか―自治から見る日本野球史」青弓社 2010年8月1日
- ・島沢優子 「部活があぶない」講談社 2017年6月14日
- ・小林信也 「高校野球が危ない!」草思社 2007年7月31日
- ・軍司貞則 「高校野球「裏」ビジネス」筑摩書房 2008年3月1日
- ・日本経済新聞「夏の出費 60万円 米高校球児、プロへの道は遠征試合」2015年8月24日 <https://www.nikkei.com/article/DGXMZ090793610R20C15A8000000/> 情報取得日 2021年6月22日
- ・氏原英明 「甲子園という病」新潮新書 2018年8月8日
- ・高校野球ドットコム「アメリカと日本の高校球児の違いは？横浜隼人に密着したニューヨーク在住の映像監督に聞く」2020年10月2日 <https://www.hb-nippon.com/column/1605-whb/14754-20201002no139> 情報取得日 2021年6月22日
- ・ハーバービジネスオンライン「アメリカでも「高校生の野球」は盛り上がる？ 日米学生スポーツを比べてみた」2018年8月21日 <https://hbol.jp/173237> 情報取得日 2021年6月22日
- ・富本靖 「諸外国の体育教育の現状と問題点―歴史に見る体育の変遷」学苑 800号 昭和女子大学近代文化研究所 2007年6月 36項-49項
- ・中澤篤史 「学校運動部活動研究の動向・課題・展望―スポーツと教育の日本特殊的関係

の探求に向けて（グローカルの過程とスポーツの変容）」一橋大学スポーツ研究 30号 一橋大学スポーツ科学研究室 2011年31項-42項

・白石陽一 田中紀子 「特別教育活動における「部活動」の位置と役割：部活動問題の「見取り図」を描く」 熊本大学教育学部紀要 67号 2018年12月17日 117項-125項

・THE ANSWER スポーツ文化・育成&総合ニュースサイト「変わろう、野球 筒香嘉智の言葉「一発勝負のトーナメント制をやめてリーグ制導入を」」2019年8月9日 <https://the-ans.jp/column/78165/> 情報取得日 2021年6月22日

・日本経済新聞 「部活の「勝利至上主義」を否定 文科省が指導指針」2013年5月27日 https://www.nikkei.com/article/DGXNASDG27016_X20C13A5CC0000/ 情報取得日 2021年6月22日

・大峰 光博, 友添 秀則 「野球部における指導者の勝利追求への責任に関する一考察」体育・スポーツ哲学研究 36巻2号 2014年73項-82項

6月30日 第一回卒論指導会レジュメ

教育学科4年 佐藤郁

09-201120

【タイトル・テーマ】

漫画など娯楽作品を、友達と、あるいはコミュニティで共有することで受ける影響。

キーワード：漫画、趣味、コミュニティ、サブカルチャー

【問題関心】

教育現場で施される教育より、学生が自ら熱意を注ぐ場で受ける影響の方が、人格形成などへの教育的影響が大きいのではないか。

特に、商業的成功をおさめている漫画など娯楽作品は、友人や SNS 上の不特定多数の人と共通する趣味となることがある。漫画を通じて人と繋がるのが、心の安らぎになったり、人間関係を深めたりするのではないか。

【研究目的】

他者と共有される趣味としての漫画に焦点を当て、学生の生活にとってそれがどのような意味を持つのかを明らかにする。

【研究方法】

<案①> Twitter など SNS で、漫画について意見や感想を共有するツイートを分析する。また、特に目立ったツイートをする個人に対し、可能であればアンケートやインタビュー調査を実施する。

<案②> 東京大学の漫画サークルに所属するメンバーを中心に、アンケートやインタビュー調査を実施する。

【今後の予定】

7月 調査対象・調査方法の決定

8月～10月 アンケート・インタビュー調査

【先行研究リスト】

高谷邦彦（2019）『サード・プレイスとしての Twitter ―子育て主婦ユーザの場合―』名古屋短期大学研究紀要 第57号

井島由佳（2020）『大学生のマンガを読む行動とマンガから影響を受けたことの一考察』社会学研究所紀要第1巻 p47-58

<http://opac.daito.ac.jp/repo/repository/daito/53107/>

奥谷めぐみ・鈴木真由子（2011）『子どもをとりまく消費文化の変遷にみる生活課題』大阪教育大学紀要 第Ⅱ部門 第60巻 p23-34

<http://meeco.blog.jp/archives/23468536.html>

加藤浩平・岩岡朋生・藤野博（2019）『自閉スペクトラム症児の会話の特徴と話題との関連：アニメ・漫画・ゲームを題材にした「趣味トーク」の実践』東京学芸大学紀要 総合教育科学系 第70巻 第1号 p489-497

乾里穂・森田健一（2021）『大学生の趣味がストレスに及ぼす影響』帝塚山大学心理科学論集 第4巻 p59-64

https://tezukayama.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1330&item_no=1&page_id=13&block_id=21

萩原浩一郎（2007）『ポールリクール『時間と物語』の虚構論としての可能性と限界』芸術研究第20号

https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/31403/20141016181400269154/AnnuRev-HiroshimaSoc-SciArt_20_1.pdf

原野利彦（1990）『物語と教育』長崎大学教育学部教育科学研究報告, 38, pp.9-15

<https://core.ac.uk/reader/58759160>

山田斗志希・上山輝（2018）『悪役の構造についての研究』富山大学人間発達科学部紀要第13巻第2号 p285 - 295

<https://core.ac.uk/download/pdf/200282879.pdf>

光クラブ（2004）『架空世界の悪党図鑑』

志観寺由貴（2017）『ろう学校における道德教育の実践』教師教育と実践知第2巻, 27～30

https://www.chs.nihon-u.ac.jp/wpchs/wp-content/uploads/2018/02/kyoushi_vol2_04.pdf

大野木裕明（2014）『「白雪姫」の心理的イメージに及ぼすグリム版あるいはディズニー版の影響』仁愛大学研究紀要 人間生活学部篇 第6号

<https://core.ac.uk/download/pdf/61337723.pdf>

河野慎太郎（2017）『戦う姫、働く少女』

池上賢（立教大学大学院生）（2009）『『週刊少年ジャンプ』という時代経験 解釈枠組みとしてのマスター・ナラティブ』マス・コミュニケーション研究 No.75

https://www.jstage.jst.go.jp/article/mscom/75/0/75_KJ00005704572/_pdf/-char/ja

池上賢（2008）「ライフストーリーにおけるメディア経験の構成」『社会学研究科年報』No.15

毎日新聞社東京本社広告局（1988）『読書世論調査 1988年版』

日本雑誌協会（2008）『JMPA マガジンデータ 少年向けコミック誌』

http://www.j-magazine.or.jp/data_001/index.html

荻野昌弘（2001）「マンガを社会学する」宮原浩二郎・荻野昌弘編『マンガの社会学』

斎藤次郎（1996）『「少年ジャンプ」の時代 子どもと教育』岩波書店

Schodt, Frederik L. (1996=1998) Dreamland Japan: Writings on Modern Manga, Stone Bridge Press. (樋口あやこ訳『ニッポンマンガ論 日本マンガにはまったアメリカ人の熱血マンガ論』マール社)

住田正樹・藤井美保 (1992) 「少年少女漫画の受容過程分析 受け手の特性と反応」『九州大学教育学部紀要 (教育学部門)』No.38

竹内オサム・米沢嘉博・ヤマダトモコ編 (2006) 『現代漫画博物館 1945-2005』小学館

谷本奈穂 (1997) 「人気マンガの魅力の構造」『マス・コミュニケーション研究』51号

瓜生吉則 (2001) 「マンガを語ることの〈現在〉」吉見俊哉編『メディア・スタディーズ』せりか書房

安川一 (1987) 「パーソナルなメディア空間 音楽, マンガ, 若者文化」香内三郎・山本武利・岩倉誠一・田宮武・後藤和彦・川井良介・安川一『現代メディア論』新曜社

●研究テーマ

キリスト教が日本の女子教育に及ぼした影響

●テーマの概要・問題関心

個人的な経験として中学受験を経験し、中高 6 年間をミッション系の女子校で過ごしたこともあり、何故日本の私立女子校はミッション系が多いのか疑問に感じてきた。日本のキリスト教徒は、人口のおよそ 1%とメジャーであるとは言い難い。それにも関わらず、私立校の約 2 割を占める宗教系の学校の 3 分の 2 以上はミッション系である。この一見歪にも思える事象の背景には、男子教育を優先し、女子教育の整備に消極的だった明治政府の存在と、キリスト教宣教師の活躍が挙げられる。日本の女子教育の先駆けとなったのは、ミセス・カロゾルスが築地 A 六番地に開いた私塾(のちの女子学院)と、ミス・キダが横浜に開いたキダ女学校(のちのフェリス女学院)であり、どちらも宣教師が開いたものである。これらをはじめとするミッションスクールは、英語教育やそれを通じた伝道活動から始まったものが、人格教育の担い手となり、後には日本人によって設立されるキリスト教系学校も台頭するなど、日本の近代女子教育を支えていくこととなった。

しかし、キリスト教の精神と戦前日本の富国強兵政策に基づいた教育方針は到底相容れるものではない。体制にそぐわないものとして消し去られた可能性すらあるだろう。そんな中で、これらの学校はどのように対処して現在まで存続し続けてきたのであろうか。ミッション系男子校との対比や、カトリックとプロテスタントの差異、転機となる 1899 年の高等女学校令公布への対応、キリスト教精神に基づいた女子教育の内容に触れつつ、それが時代ごとに評価を受けて今に至るのかについて考えていきたい。

●研究目的

人口に占めるキリスト教徒の割合が多いとは言えない日本において、キリスト教系の学校がどうして女子校に多いのかを歴史的観点から考えていきたい。明治期から戦中、戦後のキリスト教と女子教育との関係性を追っていくことで、キリスト教が日本の女子教育に果たした役割を考えるとともに、今後期待される働きを考察していくことが目的である。

●今後の予定・方針、研究の方法

昨年履修した「戦後教育歴史演習」で調べたテーマと近い為、まずはそこで調べたことを精

査しなおすことから始める。その後はプロテスタントの女子校として女子学院中学・高等学校を参考にしつつ、以下の参考文献を読み進めていく予定である。対比させるキリスト教系の男子校やカトリックの女子校は現時点では未定であるが、どこかに注目していきたいと考えている。また、キリスト教精神が教育や学校方針にどのように活かされているかを学ぶためにも、キリスト教や聖書についての資料も目を通していきたい。

●参考文献リスト

- ・女子学院資料室委員会 『目で見える 女子学院の歴史 改訂新版』、学校法人女子学院、2012 年
- ・山田美穂子 「『明治日本における女子教育とキリスト教 教育の試みの一例：女子学院の歩み』」、『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第 23 号、青山学院女子短期大学総合文化研究所、2015 年、3-17 頁
- ・矢口徹也『女子補導団 日本のガールスカウト前史』、成文堂、2008 年
- ・クリーグ 波奈「『キリスト教主義学校の役割とその教育的意義：宗教を通じた価値の社会化の視点から』」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 56 巻、東京大学大学院教育学研究科、2017 年、377-387 頁
- ・舟木譲「『キリスト教主義教育の可能性』」、『エクス：言語文化論集』第 8 号、関西学院大学経済学部、2013 年、87-106 頁
- ・町田健一「『キリスト教学校と道徳の教科化 一問い直される幼・小・中・高における聖書科カリキュラムと教員養成・研修一』」、『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第 7 号、北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部、2014 年、1-9 頁
- ・女子学院同窓会『矢嶋揖子生誕 180 年・原胤昭生誕 160 年記念展 冊子』、2013 年
- ・『キリスト教学校教育』バックナンバー、一般社団法人キリスト教学校教育同盟 「『同盟百年史紀要』第 3 号 教育同盟の戦後の遺産と克服すべき課題 - 「内外協力会」関連資料について」
- ・小口 功「日本における男女共学の成立と展開の分析視点」、『近畿大学教育論叢』26(1)、2014 年、69-93 頁
- ・野口真、濱野道雄 「宗教教育の課題 - 「宗教的情操」を手がかりとして-」、『神学論集』第 74 巻 第 8 号、2017 年、87-114 頁
- ・老川慶喜・前田一男 『ミッション・スクールと戦争—立教学院のディレンマ—』、東信堂、2008 年
- ・真野一隆 『日本における宗教教育の可能性—キリスト教主義的学校の明日に向けて—』、キリスト新聞社、1985 年
- ・阿部義宗 『日本におけるキリスト教学校教育の現状』、基督教学校教育同盟、1961 年
- ・久山康 『日本キリスト教教育史・思潮篇』、キリスト教学校教育同盟、1993 年

- ・佐藤八寿子 『ミッション・スクール ―あこがれの園』、中央公論新社、2006 年
- ・青山玄 「明治・大正・昭和初期カトリック信徒の宣教活動」『南山神学』第 10 号、1987 年、177-196 頁
- ・青山玄 「明治期における日本のカトリック教会」上智大学中世思想研究所監訳『キリスト教史』第 9 巻 11 賞、平凡社、1997 年、435-461 頁
- ・カトリック女子教育研究所 『カトリック女子教育研究別冊 改訂カトリック女子教育史 関連歴史年表 1865~2000 年』、2003 年
- ・イエズス会日本管区編『100 年の記憶ーイエズス会来日から一世紀』、南窓社、2008 年
- ・キリスト教史学会一編『近代日本のキリスト教と女子教育』、教文館、2016 年

1. 取り扱うテーマ(予定)

中高生の「居場所」問題はどのような文脈で語られるようになってきたのか

2. テーマの概要や問題関心

私は2年間文京区青少年プラザ b-lab という中高生専用施設でインターンを行った経験から、「学校」「家庭」以外の第三の居場所が一定数の中高生にとってかけがえのない居場所になっているという事実を痛感してきた。また、6月上旬に中高生施設のパイオニア的存在であるゆう杉並を運営する、杉並区の子ども家庭部自動青少年課事業係長の小田正人さんへのインタビューとゆう杉並の見学機会をいただき、1997年の開館時から「中高生が主役になれる場所」「中高生の意見を活かし、参画できる場所」「本物・プロと出会える場所」というコンセプトをもとに、“子ども主導”かつ、“どんな子に対してもあたたかく迎え入れる”居場所作りを徹底してきた施設を肌で実感した。実際、都内だけを見ても b-lab やゆう杉並のみならず、中高生専用施設 CAPS など、中高生をメインターゲットとした児童館は多数存在しており、その実践を対象とした研究も豊富である。

その一方で、このような「学校」「家庭」以外の第三の居場所という概念は、どのような社会背景から成立し、重要視され、中高生にとっての居場所作りへと繋がっていったのだろうか。新聞記事検索から、「中高生×児童館」「中高生×居場所」という概念が台頭し始めたのは1990年代はじめからであり、またインタビューから中高生施設のパイオニア的存在であるゆう杉並の設立計画が立ち上がったのも同じころであるとわかった。本論文では、そもそも(中高生に限らず)居場所はどういう文脈で問題になってきたのか、そしてその上でなぜ中高生の居場所が語られるようになったのかについて、主に1990年代から現代までの流れを歴史的な観点で読み解いていきたいと考えている。

3. 研究目的

日本において「学校」「家庭」以外の第三の居場所という概念がどのようにして成立してきたのかを歴史的視点で明らかにするためである。上記の中高生施設、特にゆう杉並の現在の現場での実践に関する研究は多くあるが、そもそも第三の居場所がなぜ必要とされるに至ったのかを学校や家庭などの問題と絡めて歴史的に研究した論文は少ないため、当時の文献・居場所に関する先行研究・児童館運営に携わる方々からのインタビューなどを通じてこの問いを解いていきたい。

4. 今後の予定・方針、研究の方法

当初は“現代の「中高生の居場所施設」の起源はいつ、どのように作られたのか”という問

いをたてており、そのためパイオニア的存在であるゆう杉並の関係者の方にインタビューに行ったのだが、当施設は何かしらの高尚な問題意識から作られたのではなく、「お試しで児童館に中高生スペースを作ったら中高生が結構来たから、中高生施設を作ってみよう」というノリでできた、とのことであった。そのため、6月中旬から問いを少し広げて、「居場所」という概念の成立過程を読み解くこと、としその中で中高生の居場所に触れることができればベターかな、という段階にいるため、まずは居場所に関する以下に列記する参考文献を通読し、まとめる作業をしていきたい。

5. 参考文献リスト

- ・「子ども白書」（1990年代中旬～2000年代上旬のもの）日本子どもを守る会
- ・「季刊福祉労働 No.56 文部省の『心の居場所』にまかせるな!」（1992）現代書館
- ・山崎隆夫，2001，「パニックの子，閉じこもる子達の居場所づくり」学陽書房
- ・住友剛，1998，「『居場所』論をはじめよう!」ノーマライゼーション研究編集委員会
- ・小沢牧子，2008，「『心の時代』と教育」青土社
- ・深谷昌志，2003，「学校とは何か 『居場所としての学校』の考察」北大路書房
- ・青砥恭，2015，「若者の貧困・居場所・セカンドチャンス」太郎次郎社エディタス
- ・新谷周平，2001，「『居場所』型施設における若者の関わり方—公的中高生施設『ゆう杉並』のエスノグラフィー—」『生涯学習・社会教育学研究』第26号 pp21-30
- ・宮地由紀子，2018，「子どもの放課後と居場所づくり」萌文社
- ・定行まり子・根橋由里子，2004，「児童館における中高生対応についての考察 地域における中高生の居場所に関する研究 その1」『日本建築学会計画系論文集』第577号，pp49-55
- ・久田邦明，2000，「子どもと若者の居場所」萌文社
- ・田中治彦，2001，「子ども・若者の居場所の構想」学陽書房
- ・鳥山敏子 1997「居場所のない子どもたち」岩波書店
- ・「杉並区立総合児童センター建設中・高校生委員会 検討結果報告書」（1994）杉並区立総合児童センター建設中・高校生委員会
- ・水野敦・小林千穂子・石川允，1997，「児童館の中高生利用の現状と中高生向け施設について：杉並区のケーススタディ」『学術講演梗概集』社団法人日本建築学会 pp345-346
- ・尾崎菜々子，2013，「中高生専用児童館『ゆう杉並』における中高生運営委員会の機能—居場所において育まれる委員の社会性及び自己肯定感—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』21号
- ・子どもの参画情報センター，2004，「居場所づくりと社会つながり(子ども・若者の三角シリーズ)」萌文社
- ・「児童館ガイドライン」厚生労働省
- ・「生徒指導リーフ『絆づくり』と『居場所づくり』」文部科学省

1. 研究テーマ 「肯定性と否定性の検討」

<章構成のイメージ>

はじめに

第1章：肯定性、否定性とは何か

第1節：否定性がもたらす諸問題の検討

第2節：肯定性、否定性とは何か

第2章：肯定性を育むための教育

第1節：幼少期の生育環境の重要性

第2節：無条件の肯定的受容の重要性

おわりに

2. テーマの概要や問題関心

人や世界に対して肯定的に接する人、人や世界に対して否定的に接する人。大まかに分けると、人をこのように区分することができるだろう。どちらの人と関わりたいかと問われると、多くの人が、前者であると答えることだろう。親としても、「人や世界に対して否定に満ちた人間」ではなく、「人や世界に対して肯定に満ちた人間」に育って欲しいと我が子に対して願うことだろう。そして、自らについて、どうありたいかと問われたとしても、「人や世界に対して肯定的に生きたい」と答える人が多いと思われる。

しかしながら、あるとき、人は他者を否定する。「私は、あなたのこんなところが嫌だ」、「君のセンス、なんか悪いよね」といった具合に。こんなことを言われて嬉しい気持ちになる人はいないと言い切って差し支えないだろう。また、あるとき、人は自らがまなざす世界を否定する。「こんな世界で生きていても意味がない」、「私がわるいのではなくて、この世界がわるいのだ」といった具合に。この否定をすることが直ちに、自らの生きやすさを高めるのかというところではなかろう。

否定するということは、自らに対しても、自らをとりまく他者に対しても、なんら良さを与えないように感じられる。しかしながら、人はしばしば、否定をする。これはなぜなのだろうか。そして、極力、否定をすることなく、他者や世界に対して肯定的に生きるためには

どうすれば良いのだろうか。これらの率直な疑問が私の問題関心の出発点である。

卒業研究では、現在、否定という働きかけが生じさせている問題について論じた上で、否定性とは何かについて論じる。同時に、肯定性とは何かについても論じる。さらに、人が、他者や世界、自己に対して肯定的に生きていくためには、どうすればいいのかという問題について、幼少期の生育環境（触れること、聴くこと、贈与することに着目）、無条件の肯定的受容などに注目しつつ論じる。そして、肯定性を育むために何ができるのかという課題に対して示唆のある論文になるよう、精一杯、試みたいと考えている。

3. 研究目的

「自分の幸せは自分が決める」という言葉は、生きることについて考えるとき、しばしば想起されるものだろう。この言葉について、より噛み砕いてみると次のようになるだろう。自分の中に、他者や世界、自己に対する基底的な肯定性が広がっていれば、その肯定性は他者や世界、自己を自分にとってポジティブなものだと心の底から感じさせてくれる。客観的に見ると、とても不幸な状況にある人でも、その人が他者や世界、自己に対しての肯定性に満ちた人であれば、その人が生きることは、その人にとって、否定すべき悲惨なものでは決してないだろう。一方で、客観的に見ると、誰もがうらやむような状況にある人でも、その人が他者や世界、自己に対しての否定性に満ちた人であれば、その人が生きることは、その人にとっては、否定すべき悲惨なことだということにもなりうる。

自分の置かれる状況は、自分の努力では、どうしても改善できないことはしばしばある。しかしながら、どれだけつらいと見える状況にあっても他者や世界、あるいは自己に対する深いところでの肯定性が広がっている人は、自分自身の人生そのものを否定することはないだろう。死んでしまうときに、自分の人生をふりかえり、「ああ、いい人生だった」と直感するか、「ああ、いやな人生だった」と直感するかは、その人の中に、基底的な肯定性が広がっているか、否定性が広がっているかによると考えられる。死の間際に、その人自身が自分の人生を意味づける直感的な否定は、その人が自分の人生を論理的に分析して、どれだけ肯定しようとしてもぬぐえないほどに強いものがあるように思われる。

人の深いところに広がる肯定性と否定性がどのようなものであるかを考察し、その起源を検討することは、人がよりよく生きるということを考えるにおいて、非常に重要なことだと考えている。肯定性を自らの深いところに広げることができれば、どんなに大変なことがあった人生であっても、直感として、肯定的に意味づけることができるようになると言えるかもしれない。

本研究の意義としては、他者や世界、自己に対して肯定的にふれることができないという苦しみを抱いている人が自らのありようを見つめ直す上での一助になることが考えられる。

また、否定的な言動をとる人に対して、その人がどのようなあり方をしているのかを知り、他者への寄り添いの姿勢を保ちながら、他者に接することができるようになっていくための一助になるものになればと考えている。

4. 今後の予定・方針、研究の方法

どのようにして基底的な肯定性が育まれるのかを考えると、肯定性を支えるものは、他者からの無条件の愛、無条件の肯定であろう。同時に、否定性を個人の中に生み出すものも、他者からの無条件の肯定的な受容の欠如であると思われる。したがって、肯定性を考えるにおいて、他者との関係性は非常に重要になってくると思われる。

他者との関係性の中での、無条件の肯定的な受容について、参考文献になるべく多くあたって検討していきたい。その際、特に「触れること」、「聴くこと」「贈与すること」に注目したい。

肯定性と否定性というものは、人の心の奥深くにある基底的なものだと考えられる。しかしながら、他者に対する肯定性、あるいは、他者に対する否定性が現出するのは、その人が発する言葉においてであることが大半であろう。例えば、いかに心の奥底は否定性に満ちた人間であろうとも、他者に対して発する言葉が肯定的なものであれば、他者から見たときに、その人は、肯定的な人間に見えることだろう。したがって、人の肯定性と否定性について考えるとき、発される言葉の肯定性と否定性について検討することも重要だと考えられる。その点についても検討していきたい。

考えたいテーマが広すぎると思われるので、何らかの形で絞り込んでいく必要があると思われる。これから文献にあたる中で、研究の可能性を広げつつも、テーマを絞り込んでいきたい。

5. 参考文献リスト

- ・田中智志『教育臨床学—＜生きる＞を学ぶ—』、高陵社書店、2012 年
- ・田中智志『教育の理念を象る—教育の知識論序説』、東信堂、2019 年
- ・田中智志『何が教育思想と呼ばれるのか 共存在と超越性』、一藝社、2017 年
- ・田中智志『臨床哲学がわかる事典』、日本実業出版社、2005 年
- ・田中智志・今井康雄[編]『キーワード 現代の教育学』、東京大学出版会、2009 年
- ・今井康雄編『教育思想史』、有斐閣アルマ、2009 年
- ・遠藤野ゆり・大塚類『さらにあたりまえを疑え!』、新曜社、2020 年
- ・矢野智司『贈与と交換の教育学 漱石、賢治と純粹贈与のレッスン』、東京大学出版会、2008 年
- ・鷲田清一『メルロ＝ポンティ 可逆性』、講談社、2020 年

- ・澤田哲生『幼年期の現象学 ソルボンヌのメルロ＝ポンティ』、人文書院、2020 年
- ・モーリス・メルロ＝ポンティ著、滝浦静雄、木田元、鯨岡峻訳『大人から見た子ども』、みすず書房、2019 年
- ・酒井麻依子『メルロ＝ポンティ 現れる他者/消える他者 「子どもの心理学・教育学」講義から』、晃洋書房、2020 年
- ・屋良朝彦『メルロ＝ポンティとレヴィナス 他者への覚醒』、東信堂、2003 年
- ・船木亨『メルロ＝ポンティ入門』、筑摩書房、2000 年
- ・メルロ＝ポンティ著、木田元・滝浦静雄・竹内芳郎共訳『言語の現象学』、みすず書房、2002 年
- ・メルロ＝ポンティ著、木田元・滝浦静雄共訳『幼児の対人関係』、みすず書房、2001 年
- ・水野和久『現象学の射程 フッサールとメルロ・ポンティ』、勁草書房、1992 年
- ・内田樹『レヴィナスと愛の現象学』、せりか書房、2001 年
- ・小泉義之『レヴィナス 何のために生きるのか』、日本放送出版協会
- ・鷺田清一『「聴く」ことの力 臨床哲学試論』、筑摩書房、2015 年
- ・高橋綾・本間直樹著、鷺田清一監修『こどものてつがく ケアと幸せのための対話』、大阪大学出版会、2018 年
- ・木村敏・野家啓一監修『臨床哲学とは何か』、河合出版、2015 年
- ・鷺田清一『「弱さ」のちから ホスピタブルな光景』、講談社、2014 年
- ・鷺田清一『哲学の使い方』、岩波書店、2014 年
- ・鷺田清一『「ひと」の現象学』、筑摩書房、2013 年
- ・大澤真幸『生きることを哲学する』、左右社、2010 年
- ・本間直樹・中岡成文編『ドキュメント臨床哲学』、大阪大学出版会、2010 年
- ・河合隼雄・鷺田清一『臨床と言葉』、朝日新聞出版、2010 年
- ・谷川俊太郎・鷺田清一・河合俊雄編『臨床家河合隼雄』、岩波書店、2009 年
- ・鷺田清一『嘸みきれない想い』、角川学芸出版、2009 年
- ・鷺田清一『死なないでいる理由』、角川学芸出版、2008 年
- ・鷺田清一『「待つ」ということ』、角川学芸出版、2006 年
- ・河合隼雄・鷺田清一『臨床とことば 心理学と哲学のあわいに探る臨床の知』、TBSブリタニカ、2003 年
- ・鷺田清一『皮膚へ 傷つきやすさについて』、思潮社、1999 年
- ・高村峰生『触れることのモダニティ ロレンス、ステイーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ』、以文社、2017 年
- ・デイヴィッド・J・リンデン著、岩坂彰訳『触れることの化学 なぜ感じるのかどう感じるのか』、河出書房新社、2016 年
- ・山口創『皮膚という「脳」 心をあやつる神秘の機能』、東京書籍、2010 年

- ・山口創『子供の「脳」は肌にある』、光文社、2004 年
- ・中田基昭『子どもの心を探る 豊かな感受性とは』、創元社、2011 年
- ・高橋和己『精神科医が教える聴く技術』、筑摩書房、2019 年
- ・遠藤利彦・渡辺はま・多賀厳太郎『乳幼児の発達と保育 食べる・眠る・遊ぶ・繋がる』、朝倉書店、2019 年
- ・河合隼雄・立花隆・谷川俊太郎『読む力・聴く力』、岩波書店、2006 年
- ・梅原猛・河合隼雄・松井孝典『いま、「いのち」を考える』、岩波書店、1999 年
- ・河合隼雄『臨床教育学入門』、岩波書店、2002 年
- ・河合隼雄著、河合俊雄編『大人になることのむずかしさ』、岩波書店、2014 年
- ・河合隼雄著、河合俊雄編『子どもと悪』、岩波書店、2013 年
- ・河合隼雄『ユング心理学と超越性』、岩波書店、2002 年
- ・石井均『病を引き受けられない人々のケア 聴く力 続ける力 待つ力』、医学書院、2015 年
- ・佐藤泰子『苦しみと緩和の臨床人間学 聴くこと、語ることの本当の意味』、晃洋書房、2011 年
- ・リチャード・E・シトーウィック著、山下篤子訳『共感覚者の驚くべき日常 形を味わう人、色を聴く人』、草思社、2002 年
- ・広岡義之『臨床教育学への招待 実存的視点より』、あいり出版、2020 年
- ・近畿大学日本文化研究所編『否定と肯定の文脈』、風媒社、2013 年
- ・樫村愛子『「心理学化する社会」の臨床社会学』、世織書房、2003 年
- ・バシュラール著、中村雄二郎・遠山博雄訳『否定の哲学』、白水社、1998 年
- ・ジョルジョ・アガンベン著、上村忠男訳『言葉と死 否定性の場所にかんするゼミナール』、筑摩書房、2009 年
- ・井尻正二『否定的精神』、築地書館、1986 年
- ・広田照幸編著『子育て・しつけ』、日本図書センター、2006 年
- ・高垣忠一郎『生きづらい時代と自己肯定感 「自分が自分であって大丈夫」って？』、新日本出版社、2015 年
- ・高垣忠一郎『カウンセリングを語る 自己肯定感を育てる作法』、かもがわ出版、2010 年
- ・野崎泰伸『「共倒れ」社会を超えて 生の無条件の肯定へ！』、筑摩書房、2015 年
- ・山本芳久『トマス・アクィナス 肯定の哲学』、慶應義塾大学出版会、2014 年
- ・野崎泰伸『生を肯定する倫理へ 障害学の視点から』、白澤社、2011 年

1. テーマ

発達・成長・教育における「責任」概念の考察（仮）

2. テーマの概要や問題関心

「責任」といわれる時、多くの場合それは懲罰、断罪、道徳的非難を可能にする条件としての概念を指しているように思われる。しかし、今日多くの論者によって、そのような「責任」の欺瞞性、虚構性が暴き立てられつつある。國分は「中動態」概念に依拠しながら、「意志」概念への批判を経由しつつ、通常「意志」と結びついていると考えられている「責任」概念に疑義を呈している。小坂井もまた「責任」について、近代に行爲の究極的な根拠としての「神」が死んだ後、自由意志という新たな「神」のもとに可能となった概念装置であると述べ、「責任」の非普遍性を炙り出している。そのほか、英米圏を中心とする一連の分析哲学者たちによって、我々が日常に用いる「責任」概念の基盤が掘り崩されてきている。

一方で、他者に問うものとしての「責任」ではなく、自ら引き受けていくような「責任」がある。あるいは、他者に対して自然と感じられるような、感じずにはいられないような「責任」である。デリダやレヴィナスは「responsibility（責任＝応答可能性）」という表現で人間存在におけるその根本性と不可避性を強調したが、さしあたり我々は、自らに呼びかけてくる他者の声に対して、誠実に聴き入れ、声を返そうとすることもできれば、強いて耳を塞ぎ、無視することもできる。そもそも、有意味な問いかけとして聴かれないこともあるだろう。いずれにしても人間は他者の声に晒されながら常に変容し続けているのであるが、他者の呼びかけへの誠実な応答は、自らの可能性について自ら介入しようとする事態、いわば自己陶冶の端緒となりうるのではないか。

教育は「責任」のこの両義性にどう向き合えばよいのだろうか。また、この概念をいかに語ってきたのだろうか。あるいは、何を語ってこなかったのだろうか。ところで、現実には「責任」を語るのは、狭義の教育実践や教育に関する言説に留まるものではないだろう。例えば学校では、多様なアクターによる行動の中で、ヒドゥン・カリキュラムとして「責任」についての何らかの態度が子どもたちに醸成されることもあり得る。まさに、意図的な仕方であれ非意図的な仕方であれ、教育は「責任」について、「無関係ではいられない」ものとして、常に雄弁に応答しているのである。したがって、道徳教育等個別の授業のカリキュラムや教育言説のみならず、教育現場で生起している状況そのものもまた分析の対象になりうるだろう。

「責任」の関連概念として、「欲望」「利己主義・利他主義」「ケア」「贈与」「自己犠牲」などにも興味を持っている。これらの概念を補助線としつつ、とりわけ発達・成長・教育における「責任」概念の意義、可能性、限界について考察したいと考えている。

3.研究目的

新自由主義において強調される「自己責任論」については、これまで数多くの批判が向けられてきた。他方、教育とその周辺の領域においては、例えば今年5月に成立した改正少年法における厳罰化傾向に見られるように、子どもの「責任」を強調する向きも根強いように思われる。このような議論が地に足をつけたものとなるために、「責任」概念そのものに対する立ち入った考察を行うことで、何らかの理論的貢献ができればいいと考えている。

また、個人的に、自分の心理的成長は「責任感覚」の醸成と軌を一にしてきたように思われるが、一方で、時に肥大化する「責任感」に悩まされてきたこともある。人間が「責任」を感じる時に何が起こっているのか、その現象がいかなる構造のもとに立ち現れているのか、という問いについても、卒論で扱えるかはさておき、念頭に置いておきたい。

4.今後の予定・方針、研究の方法

テーマを絞り込む時間が今まで取れなかったもので、夏頃までにピックアップした文献に一通り目を通し、「責任」概念とその周辺領域に関する議論への理解を深めつつ、自分の最も重要な問題関心がどこにあるのか探っていききたい。研究方法に関しては、基本的には文献読解が中心となる予定である。

5.参考文献

- 大澤真幸(2015)『自由という牢獄 責任・公共性・資本主義』,岩波書店
國分功一郎(2017)『中動態の世界 意思と責任の考古学』,医学書院
國分功一郎(2020)『<責任>の生成—中動態と当事者研究』,新曜社
小坂井敏晶(2020)『増補 責任という虚構』,筑摩書房
品川哲彦(2007)『正義と境を接するもの——責任という原理とケアの倫理』,ナカニシヤ出版
瀧川裕英(2003)『責任の意味と制度—負担から応答へ』,勁草書房
田村均(2018)『自己犠牲とは何か 哲学的考察』,名古屋大学出版会
古田徹也(2013)『それは私がしたことなのか 行為の哲学入門』,新曜社

- 矢野智司(2008)『贈与と交換の教育学—漱石、賢治と純粹贈与のレッスン』,東京大学出版会
- 湯浅博雄(2020)『贈与の系譜学』,講談社選書メチエ
- Arendt, Hannah(2016)『責任と判断』中山元訳,ちくま学芸文庫
- Connolly, William(1998)『アイデンティティ/差異 他者性の政治』杉田敦、斎藤純一、権左武志訳,岩波書店
- Derrida, Jacques(2004)『死を与える』廣瀬浩司、林好雄訳,ちくま学芸文庫
- Heidegger, Martin(1994)『存在と時間 上下』細谷貞雄訳,ちくま学芸文庫
- Levinas, Emmanuel(2005)『全体性と無限 上下』熊野純彦訳,岩波文庫
- Levinas, Emmanuel(1999)『存在の彼方へ』合田正人訳,講談社学術文庫
- Ortega, J.(2020)『大衆の反逆』佐々木孝訳,岩波文庫
- Rand, Ayn(2021)『SELFISHNESS 自分の価値を実現する』田村洋一監訳,オブジエクティビズム協会訳,Evolving
- Rand, Ayn(2008)『利己主義という気概 エゴイズムを積極的に肯定する』藤森かよこ訳,ビジネス社
- Strawson, P.F.他(2010)『自由と行為の哲学』門脇俊介、野矢茂樹訳,春秋社
- Wisser, Richard(2012)『責任—人間存在の証』平野明彦、中山剛史、町田輝雄、皆見浩史訳,理想社

【1.タイトル】

大テーマ：シティズンシップ/エージェンシー構築の現象学

テーマ(仮)：非行経験者/犯罪受刑者を巡る社会参画と排除の現象学的分析

卒論題目(仮)：非行経験者/犯罪受刑者のエージェンシー構築の現状分析

【2.章構成(仮)】

序章：はじめに / 本論の目的 / エージェンシー概念についての整理

第 1 章：エージェンシーの構築・発揮に向けての現状

第 1 部：非行経験者/犯罪受刑者の社会参画とエージェンシーの構築に対する社会的状況

第 2 部：公教育に於けるエージェンシーの構築、及びその発揮を巡る日本社会の現状

第 3 部：非行経験者/犯罪受刑者の更生教育の現状とエージェンシー構築の関連性

第 2 章：逆境に於ける生存体験の意味付けと変化に関する先行研究整理(部構成は未定)

第 3 章：非行経験者/犯罪受刑者のエスノグラフィー再分析(部構成は未定)

第 1 部：社会・教育の現状の経験のされ方について

第 2 部：自らの生存体験の意味付けの変容について

第 3 部：エージェンシーの構築と発揮を促す/妨げるトリガーとなる社会

終章：まとめと考察、本論の限界と今後の展開

【3.テーマの概要・問題関心】

本研究の目的は、逆境の中で生き抜いてきた人々(所謂サバイバー)が自らの逆境に於ける生存体験をどのように意味付けているか、また、それをエージェンシーの構築と、社会に対してそれを発揮する過程に於いて、どう活かしているか/活かしていないかを明らかにする事にある。本論はその中でも非行経験者/犯罪受刑者にターゲットを絞り、更生教育、及びその後の社会生活の中での語りに着眼しながら上述の内容を明らかにしていきたい。

大学入学後、キャンパス内外での学びや自らの休学・復学などを通し、(極めて月並みな表現だが)自らの恵まれた立場や、社会には様々な人がいるという事を感じる機会が多く得られた。その中でも一際強い関心を抱いたのが、犯罪等により刑務所や少年院に入る事を余儀なくされた人々である。彼ら/彼女らの犯罪に至ったバックグラウンドを知るにつれ、親や教師といった人間関係の不和によって身も心も荒んでいた自分はコインの表裏であり、一つきっかけが違えば自分もまた塀の向こう側の人間になっていたのではな

いか、という事を繰り返し考えた。

望むと望まざるとに関わらず、私たちは社会の中で他者と共生していく事を余儀なくされるのであり、それは元犯罪者というレッテルを貼られた人々も同じである。幸い、私は周囲の環境や人々に恵まれたこともあり、自らを見つめなおす機会や自分の人生・周囲の人々を含む社会に対する主体的な関わり方とその意志等に関して考える機会を得られたが、教育を受ける事は誰にでも保証される権利であり、まして犯罪の遠因に教育機会の喪失があると考えられやすい彼ら/彼女らに対して教育機会を保証する事は、社会の安定・個人の人権という双方の観点からも重要である。勿論、人的・時間的資源といった現実からカバーできる範囲は限られているが、その中で私はエージェンシーに着目し、これを構築しているプロセスについて検討したいと考えた。

エージェンシーについて簡潔に整理すると、OECD(経済協力開発機構)が2015年以降進めている Education 2030 プロジェクト、及びそこで策定された OECD ラーニング・コンパス 2030 で目標とされている概念であり、「自分の人生および周りの世界に対して良い方向に影響を与える能力や意志を持つこと」と定義されている。同プロジェクトではエージェンシーの枠組みを多岐に設定しているが、今回は学校教育に於いて開発する事を念頭に置かれた<生徒エージェンシー>(Student Agency)、及び集団の一員としての<共同エージェンシー>(Co-Agency)に焦点を絞り、非行経験者/犯罪受刑者に適応する事を念頭に検討する。

非行経験者/犯罪受刑者に関する先行研究は多数存在しており、例えば都島(2020)は非行少年の「立ち直り」に着目し、少年院教育とその後の社会生活の質的研究を通してその当事者モデルを提案している。また、知念(2018)はヤンキーと呼ばれる若者がどのような生活世界の中を生き抜いているか、フィールドワークを基に描き出している。こうした支援の在り方については公的機関も支援の指針を整えており、例えば東京都は『非行少年・再犯防止支援ガイドブック RE:START を応援するあなたへ』の中で、非行少年の再犯防止と社会復帰支援を目的とした支援者の在り方や支援団体のネットワークを纏めている。しかし、このような研究、或いは実践の中で描かれているサバイバーの多くは、社会の在り様に対して自らを適応させていく存在として描かれており、社会の側が自らに負荷を強いているという現状に対抗するプロセスを描き出した研究や実践例は極めて少ない。

最も、それまで人間として不当な扱いをされ、それにより生きづらさを抱えていたサバイバーが、自らの権利と義務といったなじみの薄い概念を受容したり、社会に対して自らの意見を主張していく、という次元に至るまでには多くの障壁がある。しかし、そのような教育は人としての権利を虐げられてきた彼ら/彼女らにこそ求められており、またそういった人々がただ弱者として社会に適合することよりも、変革を起こす可能性を備えた存在として主体的に社会参加する事にこそ、民主主義社会の可能性が見出せるのではないかと考える。

とはいえ、エージェンシー構築の体系立った教育は公教育の現場でも追及されている

ものであり、現状の更生教育の中で十分に行われていない事は先行研究からも予測しうる。そこで、エージェンシーの構築/発揮に成功した例のみではなく失敗した例にも着目し、非行経験者/犯罪受刑者がエージェンシーを構築・発揮するにあたって、現状の更生教育とその後の社会復帰に於いて何が充足しており、何が不足しているかという事について整理する事を本論の終着点としたい。

【4.研究目的と手法】

- ・章立ては前述の通り。
 - ・全体の章立ては、エージェンシーに関して以下のような前提を立てている。
 - ・エージェンシーは自分の生存体験の解釈をベースに構築されるものであり、その解釈を書き換えたり、或いは生存体験そのものが変容する事で再構築され、発揮が促される(妨げられる)ものである。そこで、生存体験の解釈はどのような現象・事象によって変化するか(第1章)と、生存体験が意味付けられ、変容するという事はその時どう体験され、どう(エージェンシー構築に+/-の方向に)作用するか(第2章)について整理し、非行経験者/犯罪受刑者に於けるその具体例を分析する(第3章)ことで、生徒にエージェンシーを構築/発揮させる為に教育を通してどのような体験をさせる(促す)事が望ましいかや、どのような社会変革が求められるかを一定程度記述する事ができる。
- ・序章では問題意識と研究目的を整理した上で、本論で展開していくエージェンシーとは何か、それを確立/発揮するとはどういう事かを簡単に整理する。
- ・第1章では、非行経験者/犯罪受刑者がエージェンシーを構築、または発揮していく上で影響を受ける社会状況・教育制度・更生教育の現状を整理する。
 - ・第1部では非行経験者/犯罪受刑者がどのような過程を経て少年院/刑務所に行きつき、そこでどのような教育が展開されているか、その中でどのような事が期待されているかについて整理する。
 - ・第2部では個人がエージェンシーを構築する・発揮するという事が日本社会、或いは公教育の中でどのように語られ、どのように扱われているかについて整理する。
 - ・第3部では非行経験者/犯罪受刑者が出所後に置かれる社会でどのような扱いを受けたり、非行経験者/犯罪受刑者というアイデンティティがどのように語られているかを整理する。
- ・第2章では、自らの逆境に於ける生存体験を意味付けるとはどういうことか、またそれがどのように意味付けられ、変化しているかについて、先行研究によって整理する。
 - ・闇雲にやると膨大になりかねないので、「社会に参加する/受け入れられる」、或いは逆に「社会から排除される/最初から見放されている」とはどう経験されるのか、また「権利/義務」の認知の変化などに関する先行研究を利用したい。
 - ・理論としては、A.Schütz や P.Berger の現象学的社会学を援用する事を検討中。ま

た、

- ・第3章では、非行経験者/犯罪受刑者のルポルタージュ・手記などを分析する。
 - ・まず第1部では、第1章で整理した社会/教育を巡る現状や実践がどのように経験されているかについて整理する。
 - ・第2部では、第2章で整理した逆境に於ける生存体験の意味付けが、どのように行われ、或いはどう変化していったかを整理する。
 - ・第3部では第1部・第2部を基に、自らの逆境に於ける生存体験の意味付けが変化する中で、どのような現象がトリガーとなってエージェンシーの構築を促す/妨げる方向への影響・変化を引き起こしたかを整理する。
- ・終章では以上の分析を整理し、得られた知見と今後の研究に向けての課題を再提示する。
- ・本来、インタビュー調査を行い、少年院/刑務所に服役した経験のある人に接触できれば理想的だが、その対象に伝手や心当たりがあるわけでもなく、今から行うには時間的制約も厳しい。そこで卒業論文では、当事者がエージェンシーを構築するにあたって彼ら/彼女らが置かれている社会的状況と更生教育の現状整理、及び書籍等の形で記述されている手記などの再分析を行い、当事者のエージェンシー構築/発揮に向けて何が必要かをある程度描き出す事を目標とすると共に、今後の展望の中で当事者へのインタビュー調査に向けてのRQを絞り込む事を目標とする。

【5.今後の方針と課題】

- ・まずは第1章で行う先行研究の調査を徹底し、第3章の手記・ルポ読み込みで分析すべきポイントを明確化する。主なポイントとしては、
 - ・エージェンシーの定義の整理、及び関係性の明確化
 - ・「社会に参加する/受け入れられる」・「社会に参加する/受け入れられる」とはどういう事か、現象学のフレームで説明を試みる。
 - ・少年院/刑務所服役経験者の社会復帰後の追跡研究の分析などが考えられる。
- ・第2章の分析枠組みがまだかなり不明瞭なので、より問題意識を絞り込み、論文全体のロジックを簡潔にしたい。現状の方針で進める場合、理論的基礎として現象学的社会学の枠組みを学ぶ必要があるため、そちらの勉強も必要。関連して自分自身が現象学のフレームにまだ馴染みが浅いので、現象学の初学者～中級者向け文献を読む必要がある。
- ・第3章は手記やルポを闇雲に当たるだけにならないようにしたいが、特にエージェンシー構築が上手く行っている例が国内で見当たる可能性が低いので、これについては海外事例を当たる可能性もある。
- ・国内事例として、実際の取り組みとその経験者(としての受刑者)の語りが結びついているものとして、映画『プリズン・サークル』の舞台となっている島根あさひ社会復帰促進

センターの取り組みに注目しており、施設見学、及び施設運営者にインタビューさせて頂く事も検討していたが、コロナにより一切の見学を中止しているとの事。

【6.予定している参考文献】

入手・確認済みのものについては◎付

《エージェンシーに関して》

◎ OECD Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework Concept note : Student Agency for 2030 (仮訳 : 2030 年に向けた生徒エージェンシー)

白井俊(2020)『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』

◎ 松尾直博・柄本健太郎・永田繁雄・林尚示(2020)『「生きる力」とエージェンシー概念の検討ー 中央教育審議会の答申や学習指導要領を中心にー』,東京学芸大学教育実践研究,第 16 集,pp.147-158

◎ 小玉重夫(2013)『難民と市民の間でーハンナ・アレント『人間の条件』を読み直す』現代書館

◎ 小玉重夫(2003)『シティズンシップの教育思想』白澤社

◎ 西東摩利花(2020)『<研究ノート> 日本のシティズンシップ教育の「市民」概念の特徴 : 経済産業省の報告書と品川区「市民科」に注目して』,成城コミュニケーション学研究,11,p21-39

◎ Qualifications and Curriculum Authority, 1998, Education for citizenship and the teaching of democracy in schools, QCA. (鈴木崇弘・由井一成訳, 2012, 「シティズンシップのための教育と, 学校で民主主義を学ぶために」長沼豊・大久保正弘編『社会を変える教育 Citizenship Education ―英国のシティズンシップ教育とクリック・レポートから』キーステージ 21, 111-210)

Crick,B. 2000 Essays on Citizenship, continuum(=2011 関口正司監訳『シティズンシップ教育論』法政大学出版局)

◎ 近藤孝弘(2009)『ドイツにおける若者の政治教育ー民主主義社会の教育的基盤ー』,学術の動向,14 卷,10 号, p.10-21

《非行や更生教育に関する理論分析》

◎ 都島梨沙(2021)『非行からの「立ち直り」とは何か 少年教育と非行経験者の語りから』,晃洋書房

◎ 竹原幸太(2018)『教育と修復的正義 学校における修復的实践へ』,成文堂出版

◎ 大塚類(2009)『施設で暮らす子どもたちの成長ー他者と共に生きることへの現象学的まなざし』,東京大学出版会

遠藤野ゆり(2009)『虐待された子どもたちの自立 現象学からみた思春期の意識』,東京大

学出版会

光岡浩昌(2012)『島根あさひ社会復帰促進センターにおける再犯防止の取組の現状と課題(特集 PFI 刑務所の現状と課題)』,犯罪と非行,(172), 94-111

手塚文哉(2020)『再犯防止をめざす刑務所の挑戦

美称・島根あさひ社会復帰促進センター等の取組み』,現代人文社

◎ Ruth,L.H. "Phenomenology and Citizenship: A Contribution by Alfred Schutz",Philosophy and Phenomenological Research,Vol.37,No.3,(1977);293-311

◎ Bayne,T. "The Phenomenology of Agency" Philosophy Compass,3/1,(2008):182-202
Schutz, A. "ON FENOMENOLOGY AND SOCIAL RERATIONS"(『現象学的社会学』,森川眞規雄・浜日出夫訳)(1981)

Schütz, A. "The phenomenology of the Social World"(『社会的世界の意味構成ー理解社会学入門』,佐藤嘉一訳)(2006)

Schütz,A , Luckmann,T. "SRTUKTUREN DER LEBENWELT"(『生活世界の構造』,那須壽訳,ちくま学芸文庫)(2015)

《当事者の手記・ルポルタージュ等》

◎結生、小坂綾子(2020)『あっち側の彼女、こっち側の私ー性的虐待、非行、薬物、そして少年院を経て』,朝日新聞出版

◎ 坂上香(2012)『ライフアーズ 罪に向きあう』,みすず書房

◎ 坂上香監督,映画『プリズン・サークル』,坂上香,2019,out of frame,2019

◎ 坂上香+東風(2020),『プリズン・サークル』劇場用プログラム

◎ 知念渉(2018)『<ヤンチャな子ら>のエスノグラフィー』,青弓社

◎ 三原一芳(2006)『少年犯罪の心的ストーリー』,北大路書房

《その他、現象学に関する基礎～発展文献など》

◎竹田青嗣、西研編著(2020)『現象学とは何か：哲学と学問を刷新する』,株式会社河出書房出版

Max van Manen(2011)『生きられた経験の研究ー人間科学がひらく感受性豊かな<教育>の世界』,村井尚子訳,株式会社ゆみる出版

◎谷徹(2002)『これが現象学だ』講談社現代新書

西原和久、張江洋直、井出裕久、佐野正彦(1998)『現象学的社会学は何を問うのか』勁草書房

◎東京都都民安全推進本部 総合推進部 都民安全推進課(2021)『非行少年・再犯防止支援ガイドブック RE:START を応援するあなたへ』

【現在の問題点・質問事項】

・当初の計画ではシティズンシップと現象学の接続をより強く意識していたが、問題意識があまりに散乱しすぎるため、絞り込む中でシティズンシップ、特に政治的リテラシーの要素を一旦棚上げすることにした。大学院以降の研究の中で接続していく事を意識しながら卒論研究を進めて行くつもりでいるが、その指針に沿って進められる保証はない。

・1章はともかく、2章(と3章)をどう進めて行くかという事にまだ明確な筋道が立てられていない。エージェンシーに関する前提は章立てに記述した通りだが、不勉強な事は否めず、今後先行研究を検討していく中で章立てから大きく変化する事は十分考えられる。

キーワード：エージェンシー・現象学・非行経験者・犯罪加害者

1. タイトル

『大学部活動における対話の在り方とその教育的意義』

2. 問題関心

筆者は中高大と運動系の部活動に参加しており、そこで得たことが筆者自身のここまでの人間形成を支えてきたと考えている。その人間形成を支えるのに重要だった部活動のあり方は、高い目標を目指すシリアスな環境の中で、仲間と対話して組織や自らを前進させることだと考えてきた。一方で、昨今の風潮として特に中高の部活動に関して、教員や生徒などの負担や体罰問題を切り口としてその在り方に疑義を唱える向きがある。また東京大学においても H25 年に運動会が大学本体から切り離され、資金的援助が受けられていない。筆者が所属していた部活動は課内の活動に比肩して自らの成長に資する経験だったと現段階では感じるだけに違和感を覚える。筆者自身は大学を卒業し、部活動に生徒や学生として参加することはなくなるが、筆者が経験した部活動のあり方を教育学の視点からとらえなおし再現性のあるものにしたい。

3. 研究目的

漕艇部における対話の在り方を教育学の視点から記述することで、大学部活動のあり方と教育活動としての位置づけを考察する

4. 研究の方法

- ・漕艇部部員における部員同士のワークショップ録画を比較検討する
- ・漕艇部部員に対するインタビューを行う

5.論文の流れ（仮）

・序論

問題関心と研究目的に触れるとともに、日本の部活動を取り巻く状況とその変遷について触れる。

・本論

漕艇部におけるインタビューや観察について記述し、とくに組織中での人との関わり

方やその変化について分析する。

・ 結論

本論の内容を引きながら、教育活動の一環としての部活動が目指すべき在り方について提示する。

5. これからの予定

- 7月 先行研究の参照
- 8月 部員に対するインタビュー
- 9月 インタビュー、録画動画の検討
- 10月 ドラフトの作成
- 12月 論文の完成

6. 指導会で伺いたいこと

- ・ 組織の中での人の関係をとらえる枠組みにはどのようなものがあるか？

・

5. 参考文献リスト：

鈴木久雄(2013)『双方向スポーツ教育活動によるコミュニケーション能力の向上』大学体育学 p13-20

金森史枝・蛭田秀一(2018)『大学における正課外活動としての体育会運動部活動の意義－体育会運動部活動を通して何を習得しているのか－』総合保健体育科学 41 巻,1 号, p. 45-54

三井陽介(2021)『社会性を育む部活動を目指して(活動報告)』研究紀要,愛知教育大学付属高等学校,48 巻,p119-127

須崎康臣・杉山佳生・斉藤篤司(2021)『運動部活動が大学新入生の生活習慣とメンタルヘルスとの関係に及ぼす影響』健康科学,43 巻,p139-148

長谷川誠(2021)『運動部活動を通じた人間関係形成能力の育成：特別活動との共通性、差異性の観点からの検討』佛教大学教育学部学会紀要,20 号,p135-147

川中紫音・鈴木雅之(2021)『中学生の学習動機づけと部活動における動機づけの関連』教育デザイン研究,12 巻,p11-18

原清治(2017)『特別活動の探求』学文社

今宿裕・朝倉雅史・作野誠一・嶋崎雅規(2019)『学校運動部活動の効果に関する研究の変遷と課題』体育学研究,64 巻 1 号,p1-20

神谷拓(2009)『部活動の教育課程化に関わる議論 過程の分析－2001 年から 2008 年までの中央教育審議会の議論に注目して－』筑波大学大学院人間総合科学研究科学校教育学専攻編,学校教育学研究紀要,2 号,p21-39

国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2011)「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」

神谷拓『運動部活動の教育学入門―歴史とのダイアログ』大修館書店

尾見康博・廣瀬文哉(2019)『生徒の自主性や自発性を妨げる部活という仕組み：退部経験者の組織コミットメントの観点から』教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要,24 巻,p1-10

田幡憲一

大本久美子・坂部涼(2020)『他者との関係構築に関する質的調査 ―良好な関係を築く要素に焦点を当てて―』大阪教育大学家政学研究会,生活文化研究,57 巻,p11-18

スポーツ庁 (2018)『運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン』

野口裕二(2019)『ナラティブ・アプローチ』勁草書房

桜井厚(2005)『ライフストーリー・インタビュー―質的研究入門』せりか書房

桜井厚(2002)『インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方』せりか書房

太田裕子(2019)『はじめて「質的研究」を「書く」あなたへ：研究計画から論文作成まで』

第一回卒論指導会発表資料

教育学部基礎教育学コース4年

09-201115 増山大吾

1：名前、タイトル

漫画『ドラえもん』の教育学的意義に迫る

2：テーマの概要と問題関心

文学作品は人間の成長・生き様に大いに影響している。漫画も全く例外ではない。中でも『ドラえもん』が今でも国民的な漫画であるのは、人々の心の成長（少年の精神的自立・友情・家族の大切さを学ぶ等）へと繋がる作品であることが語り継がれているからではなかろうか。また、ドラえもんほど老若男女に認知されている漫画は珍しく、ストーリーも起承転結型で読みやすいことに加えてそれぞれに大きなテーマが織り込まれており、読者へと与える影響は大きいと思われる。

とりわけ、ドラえもんが教育現場においてどのような扱いをされており、どのような切り口で教育に利用されているのか、結果的に子供達の成長にどのような形で寄与しているのか、これらのドラえもんの教育学的な意義を明らかにする。

また、既存の教育実践（例えば、「ぼくの生まれた日」という題材では家族の大切さが説かれており、「さようなら。ドラえもん」では、努力をすることの尊さや美しさなどが説かれている。）から掘り下げるだけではなく、今までは着目されていなかったような新たな角度からの『ドラえもん』の位置付けや、それらが今後教育現場で新たに導入される可能性も模索する。（具体的な授業内容も併せて提示する可能性あり）

3：研究目的

ドラえもんが教育現場においてどのような扱いをされており、どのような切り口で教育に利用されているのか、結果的に子供達の成長にどのような形で寄与しているのか、これらのドラえもんの教育学的な意義を明らかにすることで、国民的漫画である『ドラえもん』が人々の成長・生き様に及ぼしてきた影響を探ることを研究目的とする。

また、今までは着目されていなかったような新たな角度からの『ドラえもん』の位置付けや、それらが今後教育現場で新たに導入される可能性を模索することで、『ドラえもん』の新たな教育学的意義・そして人の成長・生き様に与えてきた新たな影響に迫ることも併せて研究目的とする。

4：今後の予定・方針、研究の方法

まず、『ドラえもん』の中でのび太くんがどのような成長をしているのかを、複数のスト

ーリーを通じて考える。また、そのようなドラえもんの物語が教育現場でどのように扱われ、子供達のどのような成長を促そうとしているのかを考え、先行研究や実際の授業例を通じて傾向を探る。

また、未だに教育界には着目されていないながらも、藤子・F・不二雄氏が子供たちに伝えたかったメッセージや、子供の成長に寄与するような題材は存在するはずである。そのようなある意味“穴場”であるドラえもんの持つメッセージを探り、それらが今後教育現場で新たに導入される可能性を模索する。（具体的な授業内容も提案？）実際に先行研究や授業の実践例を参考にしつつ、ドラえもんの漫画を再読して自身で発見しようと考えているものの、まだ模索中。藤子・F・不二雄ミュージアムへのフィールドワークはぜひ織り交ぜたい。

5：参考文献リスト

- ・藤子・F・不二雄『ドラえもん』45巻&+5巻
- ・その他藤子・F・不二雄氏の作品
- ・『小学館版 学習まんが人物館 藤子・F・不二雄』
- ・永井均『マンガは哲学する』
- ・倉石一郎『テキストと映像がひらく教育学』
- ・山田夏樹『カルチャラル・スタディーズとしてのマンガ研究—藤子不二雄 A、藤子・F・不二雄を中心に』（2002）
- ・岸圭介『マンガ教材の影響による関心・意欲の分析：「国語科授業のマンガ教材活用における関心・意欲の諸様相モデル」の構築』
- ・神奈川県藤沢市立辻堂小学校 松下義一教諭『ドラえもんの『タンポポ空を行く』を活用した授業（小学3年生）』
- ・山田暢子『娯楽化する教育-「ドラえもん」のエデュテイメント教材を中心に-』（2004）
- ・『小学校特別の教科道徳資料集「ドラえもん作品編」』
- ・『親子で学べる小学校特別の教科道徳「ドラえもん作品編」』
- ・筑摩書房編集部『藤子・F・不二雄「ドラえもん」はこうして生まれた』（2014）
- ・鈴木さとみ『『子ども』の漫画の永遠性—藤子・F・不二雄作品の世界観』
- ・ドラえもんルーム『藤子・F・不二雄の発想術』
- ・横山泰行『『のびた』という生きかた』
- ・横山泰行『ドラえもんの謎』
- ・横山泰行『ドラえもん学』
- ・横山泰行『ドラえもんの「育て方」 人生に必要なことは、すべて「ドラえもん」が教えてくれた』
- ・横山泰行『「スネ夫」という生きかた』
- ・鳴門教育大学『ドラえもんといじめ』（2001）
- ・香山リカ『87%の日本人がキャラクターを好きな理由』（2000）

- ・倉田新『藤子不二雄マンガの魅力』（1987）
- ・白井裕美子『学習教材としてのマンガのあり方』（2002）
- ・下田真巳子『藤子・F・不二雄の世界』（1998）
- ・昭和学院短期大学『ドラえもん—その愛される理由』
- ・松谷容作『マンガを語るもう一つの方法：認知心理学を援用した『ドラえもん』分析を通じて』
- ・笹田裕子『子供向けフィクションの中の「願いごとを叶えるもの」：サミアドとドラえもんの比較』

1. テーマ

高度成長期の「就職組」生徒たちの中学校経験

2. テーマの概要・問題関心

高度成長期（1950年代後半～1960年代）の当時、日本の中学校では中学三年生の段階で進路希望に応じて「進学コース」と「就職コース」にコース分けを行う場合があり、「進学コース」の生徒たちは「進学組」、「就職コース」の生徒たちは「就職組」と呼ばれていた。このうち、卒業論文では「就職組」と呼ばれた人たち、つまり中学卒業後の就職を予定していた人たちの歴史について調べることを考えている。

「就職組」について当時の言説や先行研究のなかでどのようなことが述べられていたかを確認してみると、まずは「進学/就職コース」の区別に関して、これを推進する立場からは「進路・適性に応じた教育のため」という理由づけがなされることが多かった。しかし、現実には高度成長期を通した高校進学率の急激な上昇と進学競争の激化のなかで「進学組」に傾斜した指導が行われ、「就職組」への指導が十分に顧みられない、という事態が現場教師や生徒からしばしば報告されていた。こうした状況下で、コース分けを批判する立場からはそのような区別は進学準備教育を過熱させ、更には「進学組」と「就職組」の人間関係に亀裂を生じさせる、という問題提起がされていた。また、先行研究においても、当時の「就職組」の人々が家庭の経済的事情などによって高校進学を断念するなかで「進学組」に対し鬱屈した感情を抱えている場合があったことが重要な点として指摘されている。

このように高度成長期の言説や先行研究を振り返ってみると、コース分けを推進する立場だけでなく、それを批判する立場や先行研究においても、進学競争の激化とそれに伴う問題を軸にして議論が行われており、進学競争の問題から距離を置いて見た「就職組」の歴史、例えば就職予定者たち自身の中学校における生活や文化といった側面はあまり検討されてこなかったように見える。

以上の問題関心に立って、卒業論文では高度成長期における「就職組」と呼ばれた人々の中学校経験を描くことを目指したいと思う。

3. 研究目的

- ①「就職組」と呼ばれた人たちの中学校経験（中学校時代の生活や文化、また生活史のなかで中学時代がどのような意味をもっていたかということ）について史料を通じて明らかにすること。
- ② 調査の結果から、高度成長期の教育史像をどのように問い直すことができるのか、という点を検討すること。

4. 研究の方法、今後の予定・方針

研究方法については、史料調査を中心に進めたいと思う。

今後の予定としては、手がかりになりそうな史料を探しながら、見つけた史料に応じて論文の焦点をさらに絞っていくことを考えている。調査にあたっては、大学図書館や国立国会図書館、日教組の教育図書館などを利用しつつ、場合によっては史料収集を目的とした現地調査を行うことも検討している。

5. 参考文献

(先行研究)

* 高度成長期の時代背景

- ・ 乾彰夫『日本の教育と企業社会』大月書店、1990 年。
- ・ 苅谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』中央公論新社、1995 年。
- ・ 苅谷剛彦・菅山真次・石田浩編『学校・職安と労働市場』東京大学出版会、2000 年。
- ・ 橋本紀子他編『青年の社会的自立と教育』大月書店、2011 年。
- ・ 渡辺治編『高度成長と企業社会』吉川弘文館、2004 年。

* 就職組、勤労青年文化について

- ・ 福岡良明『「勤労青年」の教養文化史』岩波書店、2020 年。
- ・ 阪本博志「戦後日本における「勤労青年」文化：「若い根っこの会」会員手記に見る人生観の変容」『京都社会学年報』8 号、2000 年、97-122 頁。

* 集団就職について

- ・ 小川利夫・高沢武司『集団就職 ―その追跡研究』明治図書、1967 年。
- ・ 加瀬和俊『集団就職の時代』青木書店、1997 年。
- ・ 澤宮優『集団就職：高度経済成長を支えた金の卵たち』弦書房、2017 年。
- ・ 早船ちよ『集団就職の子どもたち』弘文堂、1965 年。
- ・ 広井忠男『上野駅 青春の旅立ち ―ある集団就職生の半生記―』新潟日報事業社、1989 年。

(史料)

* 社会問題としての「進学/就職組」

- ・ 日本子どもを守る会編『子ども白書 1967 年版』日本子どもを守る会、1967 年。
- ・ 松浦孝作『問題児 ―街頭の子らをどうするか』帝国地方行政学会、1962 年。

* 「就職組」に対する教師のまなざし、実践

・今井誉次郎・宮坂哲文監、愛知・設楽教師の会著『私たちの学級経営 中学三年』明治図書出版、1957 年。

・周郷博・宮原誠一・宮坂哲文編『中学三年生の学級改造』国土社、1962 年。

・全国生活指導研究協議会編『学級集団づくり・中学 3 年』明治図書出版、1962 年。

・日本教職員組合編『日教組教育研究全国集会報告書 進路指導』日本教職員組合、1958-1969 年。

・北国新聞社学芸部編『中学生は考える』北国新聞社、1965 年。

・蒔田晋治「就職組という学級 ―中学校の学級経営―」『教育』4 巻 4 号、国土社、1954 年、59-67 頁。

・吉村徳蔵『現代中学生気質』三一書房、1962 年。

* 中学生の作文集

・太田昭臣編『中学生の生活と証言 (1,2,3 巻)』太平出版社、1969 年。

・日本作文の会編『中学生・私たちの生活と意見 (1,2,3 巻)』小峰書店、1963 年。

1. 仮タイトル（取り扱う予定のテーマ）

ペーターゼンのイエナ・プラン教育—社会の中で「個性」を尊重する生き方に資する可能性の検討

2. テーマの概要や問題関心

出発点として、世間の風潮的に良いとされているからと納得感のないままやらなければならない努力に対する違和感がある。例としては、各学校段階の最終学年になるとやらされる受験勉強や、就職活動、それに付随する資格取得のための勉強などである。これらに誰もが一度は取り組んだのは、少しでもいい大学、いい企業に入るのがいいという風潮が背景にあったからではないだろうか。そうした風潮が身に染みていて何の違和感もなく努力できる人や、何か真っ当な意味づけを自らした上で努力できる人もいるかもしれない。しかし、「なぜこんなことをしているのだろう」とどこかでそうした努力に違和感を感じる人もいるだろう。

ではどのような努力なら違和感を感じることなく続けることができるのだろうか。その一つの答えとして、個人の関心や特性を最大限伸ばすこと資するような努力が考えられる。ここでは個人の関心や特性を「個性」と表現したいと思うが、そのような「個性」を尊重するような風潮が社会の中に広まれば、息苦しい努力をせずのにびのびと前に進んでいけるのではないか。

とはいえ、自分勝手に好きなことをやっていては社会から疎外されかねない。「個性」を尊重しつつ社会の中で生きていくことができるようになるような教育とはどのような教育なのか、そしてそれが可能な教育空間とはどのような空間なのかを考えようとした際に、ドイツの教育学者であるペーター・ペーターゼン（Peter Petersen, 1884-1952）と彼の実践であるイエナ・プランに出会った。

ペーター・ペーターゼンはドイツ出身の教育学者であり、ドイツのイエナ大学の教育学教授であった 1924 年に同大学附属の実験校でイエナ・プラン教育を創始した。イエナ・プランは、年齢別学年学級制を廃止し、異なる年齢・階層・能力の男女を混ぜ合わせることを特徴としている教育である。第二次世界大戦などの影響によりドイツ国内で広がることはなかったが、1960 年代以降オランダで大きな発展を遂げた。ペーターゼンにとって人間は何らかの能力の有無によってその価値が決まるのではなく、「全人」として最初から必要とされている存在（佐久間, 2010）であり、各人の個性を尊重しようとする姿勢がうかがえる一方で、「イエナ・プラン教育では、子供を育てるに当たって、子供が育ち、やがて一員となっていく社会とはどうあるべきなのか、ということについて、大変明確な理想像を言葉にし

ている」(リヒテルズ, 2004, p.81) と指摘されるように子どもたちが社会の中で生きていくことも忘れずに視野に入れている。教育において個性の尊重と社会化は一見相反するように見えるが、イエナ・プランではそれが両立できるとされているように思われる。そこで本研究では、イエナ・プランにおいて子どもが社会の中で生きていけるようにする社会化としての教育と、各々の「個性」を尊重し、個人から内発される努力を肯定し促すような教育の両立をどのように構想しそして実践されているのか、ペーターゼンの思想、イエナ・プランの構想と実践例から探りたい。

3. 研究目的

上記の問題関心から、ペーター・ペーターゼンの思想とその実践であるイエナ・プラン教育を研究対象とする。これまで、イエナ・プランはその際立った特徴である異年齢・異学年交流や、人格形成の場としての「教育共同体 (Erziehungsgemeinschaft)」・「学校共同体 (Schulgemeinde)」の観点からの研究はなされてきた (佐久間 2010, 2016、安藤 2020)。また個別教育の観点からも研究がなされてきた (リヒテルズ 2004, 2006)。しかし、「個性」を尊重と社会化の両立という観点から分析している研究はまだ見られない。そこで本研究は、ペーターゼンの教育思想とイエナ・プランを「個性」の尊重と社会化の両立をキーワードにして分析し、ペーターゼンの思想およびイエナ・プランが社会化としての教育を意識しつつ、どのように各々の「個性」を尊重し、個人から内発される努力を肯定し促すような教育を実現しようとしているのかを明らかにすることを目的としたい。

4. 今後の予定・方針・研究の方法

ペーター・ペーターゼンの思想とイエナ・プランの実践事例を、「個性」の尊重と社会科の両立という観点から分析する。

ペーターゼンの思想については、「小イエナ・プラン」を読み解くほか、佐久間 (2010, 2016, 2019) や伊藤 (2010)、リヒテルズ (2006) の解説を参照する。イエナ・プランの実践については、リヒテルズ直子のオランダにおけるイエナ・プランの実践に関するレポートのほか、海外論文でイエナ・プランに触れているものを参照する。

5. 参考文献

ペーターゼン, P. 山崎準二訳「小イエナ・プラン」三枝孝弘・山崎準二・ペーターゼン『学校と授業の変革』明治図書、1984年、68-217頁 Petersen, P. (1930), Der Kleine Jedaplan Weinheim/Basel
三枝孝弘「学校と授業の変革 解説」三枝孝弘・山崎準二・ペーターゼン『学校と授業の変革』明治図書、1984年、7-66頁。
佐久間裕之「ペーターゼンにおける教育共同体と民主主義」『日本教育方法学会紀要』第45号、2019年、49-59頁。

佐久間裕之「ペーターゼンにおける *Mischung* の教育的意義」『ペスタロッチャー・フレーベル 学会課題研究第3回会合』2010年、1-6頁。

佐久間裕之「ペーターゼンにおける「教育共同体」思想の特質」『玉川大学教育学部紀要』、2016年、49-67頁。

佐久間裕之「海外教育界の動向 ペーターゼンとイエナ・プラン」『教育新世界』第35巻第1号、2010年、45-48頁。

伊藤敏子「ペーターゼン教育学における心身問題の射程——イエナ・プランにみる心と身体
の接点から」『三重大学教育学部研究紀要』第61巻、2010年、167-179頁。

伊藤敏子「新教育運動とナチズムの関係をめぐる研究の展開：ドイツにおけるペーターゼン
とイエナプランへのまなざし」『近代教育フォーラム』第18巻、2009年、285-288頁。

江頭智宏「1930年代における学校共同体ヴィッカーズドルフ」『飛梅論集』第3巻、2003
年、129-143頁。

安藤和久「イエナ・プランにおける「居間の教育」思想と学校改革——ペーターゼンによるペ
スタロッターの受容と展開」『日本教育方法学紀要『教育方法学研究』』第45巻、2020年、49-
59頁。

フレーク＝フェルトハウズ・ヒュバート＝ウィンターズ・リヒテルズ直子訳『イエナプラン
共に生きることを学ぶ学校』ほんの木、2020年。

リヒテルズ直子『オランダの教育——多様性が一人ひとりの子供を育てる』平凡社、2004年。

リヒテルズ直子『オランダの共生教育——学校が＜公共心＞を育てる』平凡社、2010年。

リヒテルズ直子『オランダの個別教育はなぜ成功したか——イエナプラン教育に学ぶ』平凡
社、2006年。

船尾日出志「イエナのイエナプラン学校のコンセプトと実践」『教職キャリアセンター紀要』
第1巻、2016年、85—92頁。

椎野信雄、上谷香陽「オランダのイエナプラン教育とオランダ社会のかかわりについて」『文
教大学国際学部紀要』第25巻第1号、2014年、41-51頁。

1. 取り扱う予定のテーマ

タイトルは未定だが、テーマとしては「共生社会」の在り方を歴史的な視点から取り扱いたいと考えている。現時点では特に、共生教育に関心を持っていた教師たちの教育実践例などを扱いたいと考えているが、今後先行研究を参照していく中で変更する可能性がある。

2. テーマの概要・問題関心

文部科学省(中央教育審議会)によれば、共生社会とは、「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」⁶であり、その実現のためには「障害者の権利に関する条約に基づくインクルーシブ教育システムの理念が重要であり、その構築のため、特別支援教育を着実に進めていく必要がある」。⁷しかし日本社会では、歴史上、それぞれに異なる「共生」の概念を持った個人・集団が、障害者運動その他の形を取りながら共生社会の実現に向けて活動してきた。活動には、障害を持つ当事者によるものもそうでないものもある。卒業論文では、特に教師たちによる共生教育の実践例に即して、当時の学校現場において当該の教師や生徒が共生について何を考えるようになったのか検討し、どのような形でそれぞれが考える共生へと向かった(あるいは向かわなかった)のかを分析したい。

なお、ここでは「共生社会」のための教育実践を幅広く「共生教育」としているが、定義づけは暫定的なもので今後変更したり狭めたりする可能性がある。

3. 研究目的

様々な共生の概念とそれに伴う実践の一例に触れ、現在の特別支援教育が念頭に置く共生の概念との異なりを考える。それによって、共生社会を考えるために重要であると考えられる視点や現在の「共生社会」の定義が見落としている視点等について考えることを目的とする。

4. 今後の予定・方針、研究の方法

今後は、まず興味関心をさらに絞りこむことを優先する。扱いたいテーマに対する先行

⁶ 文部科学省「1. 共生社会の形成に向けて」2012年9月

(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1325884.htm、2021年6月20日情報取得)。

⁷ 同上。

研究や現在の研究の状況について、下記に挙げる文献をはじめとして多くの文献に触れることで知識をつけたい。参考文献に触れる中でテーマが変更される可能性も大いに残っているが、8月中旬頃までにはテーマを確定させ、扱う事例の検討を進められているような状況にしたい。

5. 参考文献リスト(暫定)

青木嗣夫・松本宏・藤井進『育ち合う子どもたち:京都・与謝の海の理論と実践』ミネルヴァ書房、1973年。

荒川勇・大井清吉・中野善達『日本障害児教育史』福村出版、1976年。

石川憲彦・北村小夜・熊谷晋一郎・山口ヒロミ・山田真『こどもの「ちがい」に戸惑うとき』ジャパンマシニスト社、2018年。

伊藤隆二『心身障害児教育の原理』福村出版、1970年。

岩楯恵美子『私も学校へ行きたい』柘植書房、1978年。

尾上浩二・熊谷晋一郎・大野更紗・小泉浩子・矢吹文敏・渡邊琢『障害者運動のバトンをつなぐ:いま、あらためて地域で生きていくために』生活書院、2016年。

河添邦俊、清水寛、藤本文朗『この子らの生命輝く日：障害児に学校を』新日本出版社、1994年。

河添邦俊『障害児と学校』新日本出版社、1979年。

北村小夜『一緒にいいならなぜ分けた—特殊学級の中から—』現代書館、1987年。

北村小夜『能力主義と教育基本法「改正」:非才、無才、そして障害者の立場から考える』現代書館、2004年。

木村泰子・小国喜弘『「みんなの学校」をつくるために—特別支援教育を問い直す—』小学館、2019年。

倉石一郎『包摂と排除の教育学—戦後日本社会とマイノリティへの視座』生活書院、2009年。

小国喜弘『障害児の共生教育運動 養護学校義務化反対をめぐる教育思想』東京大学出版会、2019年。

國分功一郎・熊谷晋一郎『〈責任〉の生成:中動態と当事者研究』新曜社、2020年。

子供問題研究会『俺、「普通」に行きたい』明治図書、1974-1976年。

篠原睦治『「障害児」観再考—「教育＝共育」試論—』明治図書、1976年。

篠原睦治『「障害児の教育権」思想批判:関係の創造か、発達の保障か』現代書館、1986年。

篠原睦治『関係の原像を描く:「障害」元学生との対話を重ねて』現代書館、2010年。

障害児就学相談研究会『新しい就学基準とこれからの障害児教育』中央法規出版、2003年。

鈴木清・加藤安雄『心身障害児教育の歴史と現状』明治図書、1973年。

鈴木文治『インクルージョンをめざす教育:学校と社会の変革を見すえて』明石書店、2006年。

中村満紀男・荒川智『障害児教育の歴史』明石書店、2003年。

西村章次『子どもたちに学ぶ：障害児保育・教育の実践から』ミネルヴァ書房、1975年。

日本臨床心理学会『戦後特殊教育 その構造と論理の批判 共生・共育の原理を求めて』社会評論社、1980年。

二見妙子『インクルーシブ教育の源流——一九七〇年代の豊中市における原学級保障運動』現代書館、2017年。

堀正嗣『障害児教育のパラダイス転換—統合教育への理論研究—』明石書店、1997年。

堀正嗣『障害児教育とノーマライゼーション—「共に生きる教育」をもとめて』明石書店、1998年。

文部省初等中等教育局特殊教育課『心身障害児の判別と就学指導』1966年。

柚木馥・鈴木克明『新しい障害児教育:統合教育の実践をめぐる』学苑社、1977年。

・タイトル

在日コリアンにおける言語的背景の差異がアイデンティティ形成にもたらす影響について

・問題関心・研究目的

私は在日コリアン3世として日本に生まれ、小学校以前は日本の幼稚園に通い、小学校・中学校を在日コリアンの学校で過ごし、高校以降は再び日本の教育機関に在籍してきた。その中で形成された価値観が、日本に生まれ育った日本人とは異なるものが多いことは半ば当然である。また一方で、私がこれまで出会ってきた在日外国人の中でも、「小学校以前まで母国にいてその後日本に渡った」「大学のみ留学で母国へ戻り、それ以外は日本に住む」などと、その「母国の経験」の動機や背景は人それぞれ異なることを感じてきた。今回の研究においては、そうした「母国の経験」の有無や差異を、その経験と最も馴染み深いと考えられる「言語体験」に絞り、個々人の言語的背景の差異が人格形成にどのような影響を及ぼすのか、より具体的には、「どの言語を第一言語と捉えつつ、どの国のアイデンティティを一番と考えて生きているのか」ということの差異を、個々人の体験に主に即して学んでいきたいと考えた。

・研究方法

在日外国人のエスニック・アイデンティティに関する先行研究の分析

母校である在日朝鮮人学校における、学生・教師との対話

在日コリアンへの世代別インタビュー・アンケート

・大まかな見通し

序論：問題関心や研究目的に触れつつ、調査対象となる在日外国人の属性を定義する。

本論①：一般的な在日外国人や移民のエスニック・アイデンティティに関する先行研究から様々な事例を挙げつつ、その言語的背景から生まれるアイデンティティの所在を、国籍や世代、歴史的背景を軸にまとめる。

本論②：実際に在日コリアン学校に赴きフィールドワークを通じて得られた、学生や教師のアイデンティティに対する実感をまとめる。

本論③：①②を通じて得られた情報をもとに、言語的背景から生まれるアイデンティティの

所在を、在日コリアンとその他民族とを比較する形で検討する。

結論：調査対象の属性差ごとに得られた個々人のアイデンティティのあり方の違いについてまとめ、その教育学的意義を探る。

・先行研究リスト

油井恵（2012）「教養文化研究所・第 5 回研究懇話会報告」『駿河台大学論叢』44, pp246-247.

梅原利夫「小中一貫教育問題の論点と実践の行方」『人間と教育』85, pp72-79.

岡村郁子『異文化間を移動する子どもたち』明石書店、2017

在日本朝鮮人総联合会「民族教育の目的」、(<http://www.chongryon.com/j/edu/index2.html>)
閲覧日：2021/06/22)

佐野通夫（2020）「教育における「不当な支配」― 朝鮮学校「高校無償化」裁判から考える―」『こども教育宝仙大学紀要』11, pp13-20.

清水睦美『フィールドワークの技法と実際Ⅱ』ミネルヴァ書房、2009

清水睦美・柿本隆夫（2003）「外国籍児童生徒と学校教育」『駒澤大学文学部教職課程教育学研究論集』19, pp119-135.

清水睦美・チューブ・サラーン（2015）「ニューカマー第二世代の青年期―義務教育の経験と就職後の生活状況との関係に注目して」『日本女子大学紀要 人間社会学部』25, pp35-49.

宋基燦（2007）「分離主義的教育空間の誕生：「朝鮮学校」の歴史」『京都社会学年報』15, pp1-27.

曹慶鎬（2013）「在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティの多様性に関する調査研究―日本学校在学生と朝鮮学校在学生の比較を中心に―」『多言語多文化:実践と研究』5, pp100-120.

高橋聡（2012）「言語教育における、ことばと自己アイデンティティ」『言語文化教育研究』10(2), pp. 37-55.

田中宏（2013）「朝鮮学校の戦後史と高校無償化」『<教育と社会>研究』23, pp55-68.

坪田光平（2018）「中国系ニューカマー第二世代の親子関係とキャリア意識―トランスナショナルな社会空間に注目して―」『国際教育評論』14, pp1-18.

額賀美紗子（2014）「越境する若者たちの複数の『居場所』」『異文化間教育』40, pp1-17.

額賀美紗子（2019）「フィリピン系移民第二世代の階層分化とエスニシティの日常的実践―エスニシティは上昇移動の資源か、障壁か―」『移民・ディアスポラ研究 人口問題と移民』8, pp245-264.

額賀美紗子・芝野淳一・三浦綾希子『移民から教育を考える―子どもたちをとりまくグローバル時代の課題―』ナカニシヤ出版、2019

法務省「令和元年末現在における在留外国人数について」、令和 2 年 3 月 27 日公表

(<http://www.moj.go.jp/content/001317545.pdf> 閲覧日：2021/06/22)

堀場裕紀江「第二言語とアイデンティティ：言語文化教育学の観点から」『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要』19, pp37-56.

三浦綾希子・坪田光平・額賀美紗子（2017）「フィリピン系ニューカマー第二世代のエスニック・アイデンティティ・ライフコースの分岐と選択的エスニシティへの変容」『国際教養学部論叢』9(2), pp69-96.

山本かほり（2013）「朝鮮学校における「民族」の形成--A 朝鮮中高級学校での参与観察から」『愛知県立大学教育福祉学部論集』61, pp145-160.

・先生方に聞きたいこと

- 「対話」を文章化する際の注意点にはどういったものが挙げられるか。

- 先行研究を通じて感じたが、たとえば在日外国人として韓国人を例にとると、どうしても歴史的軋轢等の側面が強調されてしまう。今回の研究主対象とする予定のないそうした要素と、どのように折り合いをつけていけば良いか。

・上記と関連して、アイデンティティの所在を捉えるにあたり、「こうあるべきである（ではない）」＝”Yes/No”を求める文脈に陥ってしまう恐れを感じているが、「どのように異なってくるか」＝”How”を研究としてまとめるためには、どういった注意が必要であるか。